幼児の教育　第111巻　第4号　平成24年10月1日発行　ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

秋 2012

since 1901

［特集］問い直そう、保育の中のあたりまえのこと
「共感」って何だろう？

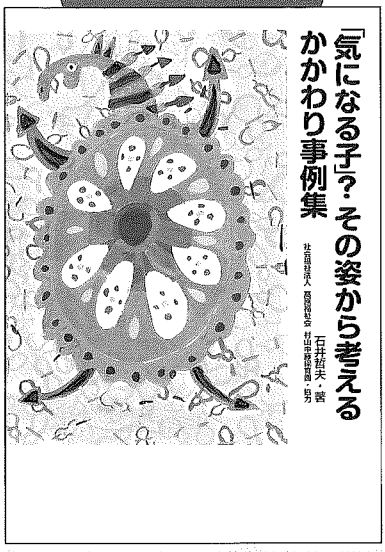
［子ども学探訪］倉橋惣三とキンダーブック
昭和初期の幼稚園を映すテキスト

［アーカイブズ］幼児の教育 110 年の散策
戦後の復興関連記事（1946年12月）より

第111巻　第4号　日本幼稚園協会

好評発売中

「かかわり」の考え方がわかる！



実践事例をていねいに読み解く！

Point ① 本書を通じて
子どもとのかかわりが見えてきます！

Point ② 本書を通じて
園外との連携が見えてきます！

Point ③ 本書を通じて
体制の整え方が見えてきます！

画：市川浩志

「気になる子」？ その姿から考える かかわり事例集

石井哲夫／著
社会福祉法人高原福祉会 村山中藤保育園／協力
（法人理事長 高橋保子先生が読売教育賞 受賞）

定価1,890円（税込）
25.7×18.2cm 120ページ　10928

こんな事例に心あたりはありませんか？

- 叱られることが多いRちゃん……4歳・女児
- 着替えのできないEちゃん……4歳・女児
- 人とかかわるのが苦手なSちゃん……3歳・女児
- お遊戯会に参加したTくん……4歳・男児
- 保育者をどうサポートするか
- 子ども家庭支援センターとの連携

対談 石井哲夫 × 野田聖子（衆議院議員）『子どもを育てるということ ―ハンディキャップをもつ子どもの親として―』を掲載

「発達障害者支援法」の産みの母、野田聖子議員が、一人の子の親として、一人の議員として考えたことを語ります。

実際に園から寄せられた事例と対応例を紹介

事例紹介 第2章 事例3から

「着替えのできないEちゃん」
（4歳・女児）

入園から1年後の様子

入園後1年経過後、4歳児クラスに進級しましたが、事中力がなくすぐに動いてしまうため、何をすべきかの時間がかかっていました。数を増やすことに関しても、足を出せばすぐ、自分から座ろうという意欲は見られませんでした。

保育者が手伝ってもらいの生得っていく各種で、大人がいなければ、徐々に自ら出来ることもありました。生活全般にモチベーションが低く、何をするにも時間がかかるので、このクラスの目標に合わなくなることが多く、最終的には、大人が手伝うことがとなることがあります。

動に関に合うという流れがすぐしまい、手伝われることが当たり前になっていました。大人が左やうとできるように自分でやろうとする気持ちが育ちなく、手伝ってもらうことを欲しく何もせずに動かず待っていることも多くなっていきました。

保育者の悩み

「着替えに時間がかかる。ボタンを見てくれない」という悩みが。

対応例（かかわりの特徴 など）

「ボタンをもつことができない」のか、それとも、**「ボタンをボタン穴に入れられない」**のか。
何ができないのか理解する。

子どもの姿に変化が！

著者・石井哲夫による解説や事例から派生した疑問に応えるQ&Aなど読み応え十分！

画：ヤマタカマキコ

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

子どものまなざしの向こうに

目に見えて写っているものの向こうに、
見る者の心に映るもうひとつの子どもの世界が
聞こえてこないでしょうか。

落ち葉のお風呂

いい気持ち

目　次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

写真
子どものまなざしの向こうに ―― 1

目次　プロローグ
待つ時間　浜口順子 ―― 2

特集
問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 7
「共感」って何だろう?
インタビュー　佐伯　胖氏　（聞き手）宮里暁美・伊集院理子・浜口順子 ―― 4
私はこう考える　わたし と あなた
― 幼児の交渉する言葉に注目して ―　鍋島惠美 ―― 15
絵を通した共感体験　泉谷淑夫 ―― 20

シリーズ
子どもが育つ場所を訪ねて
バオバブ保育園ちいさな家　川辺尚子 ―― 24

実践研究
私の保育ノートから
子どもとミュージカル　榊原友里 ―― 30
子どもと過ごした宝物の生活　保坂悠希 ―― 36

保育エッセイ
続・心が育つということ
外に向かう気持ち・内に向かう気持ち　豊田一秀 ―― 42

からだ考
食べる・つながる・育つ
『ぶた　にく』から垣間見える農業と命の循環　水流源彦 ―― 46

子ども学の源流を次世代につなぐ
幼児の教育 秋2012
第111巻 第4号

子ども学探訪
編輯顧問 倉橋惣三 とキンダーブック
昭和初期の幼稚園を映すテキスト 浜口順子 ―― 50

特別寄稿
「この霧が晴れるまで」他4篇
～ 母親が詩に綴った「福島発、子どもたちの現在」～ 大澤秋恵 ―― 56

論考
保育者の誕生 ― 東京女子師範学校初代主任保姆 松野クララ来日の経緯について ― 立浪澄子 ―― 61

アーカイブズ
幼児の教育110年の散策 戦後の復興関連の記事から
― 第45巻第3号（1946年12月）より ― 佐治由美子 ―― 67

子ども学のひろば
学会 研修会情報・読者投稿・エピローグ他 ―― 71

プロローグ 待つ時間

浜口順子

幼稚園で「バスを待つ遊び」をする話を聞いた。写真を見ると、時刻表らしき紙が貼り付けてあるバス停の前で、一人の三歳児が体を傾け、廊下の彼方を首を長くして見やっている。五歳児が段ボールで作ったバスだ。いつまた来るかわからない。

待つのが苦手な大人は多い。待つ時間は無駄で、もったいないような気がする。だから「暇つぶし」に本を読み、道を歩きながらも音楽を聞く。観光地へ行っては名所旧跡を忙しく回る。そういう時間意識のもとで、人を待たせるというのは、悪である。この常識で、つい大人は、子どもをも待たせてはいけない、と思い込んでいないか。

こんなことを考えていた矢先、保育園の午睡前のひととき、「寝たくない」と言う三歳児二人に絵本を読んでやる機会があった。途中、一人のほうが、「そこで止めて。靴下を置いてくる」と離れてしまう。私はそのまま動かず、じっとしていた。もう一人の子も何も言わない。少し長いかな？ と私が思い始めた時、その子も少しびくりと動いた。と、ちょうどそこへ、先程の子が「いいよ」と戻ってきた。何もなかったように再開。読み終わったあと、ひっそりと、二人は寝床のある保育室に戻った。

特集

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと7

「共感」って何だろう？

インタビュー

さえき　ゆたか
佐伯　胖氏

認知心理学者。青山学院大学教授。東京大学名誉教授。
著書：『「学び」の構造』東洋館出版社（2000）、『共感 －育ち合う保育のなかで』（編著）ﾐﾈﾙｳﾞｧ書房（2007）ほか

保育・幼児教育の世界で、あたりまえのように、大切に使われている言葉、今回は「共感」を特集します。『共感』という本も出していらっしゃる佐伯胖先生に、まずインタビューさせていただきました。共感って、人間同士だけでするものじゃないのかも……？　どんな質問をしても、「目からうろこ」のお話を伺うことができました。

「私はこう考える」のコーナーでは、保育の世界、絵画の世界から、「共感」について面白いお話をご寄稿いただいています。

（編集委員会）

聞き手　宮里暁美・伊集院理子（お茶の水女子大学附属幼稚園）
浜口順子（お茶の水女子大学大学院）

痛みや苦しみに対する共感

宮里　保育の中で共感という言葉はよく使われています。子どもが楽しんでいることに共感するというような感じで、保育者が子どもを理解する時の大事な姿勢として共感という言葉が使われることがよくあるように思うけれど、子ども同士が共感するっていうのはどういうことなのかな、と改めて考えていたらわからなくなってきたんです。例えば、楽しく一緒に滑り台を滑っている子どもたちがいるとして、そこでは同じ楽しさを味わっているんだけど、これって共感っていうことなんだろうか。子どもが共感するってどういう状態のことを指すのか、知りたいと思うのですが。

佐伯　これは非常にいいところで話が始まりました。「共感」は英語で言うと、エンパシー（empathy）。意外だと思われるかもしれないけれど、empathy の研究は、動物行動学では昔から重要なテーマになっている。他人の痛みや苦しみに対して「ほうっておけない」ということが最も中心的なテーマで、他人と「同じ（楽しい）思い」を共にすることではありません。つまり、隣で苦しんでいるチンパンジーがいると何とか助けてあげたいとか、何とかしてあげようとするということが共感の研究の最も中心的テーマなんです。

　生まれて間もない赤ちゃんが、他の子が泣くと自分も泣く。自分の泣き声を録音して聞かせても泣かない。他人の声だから泣くんです。生後六～八か月くらいの子どもが、困っている子どもを見つけると何とかしてあげてほしいと保育者に助けを求める行為をする。他人のことが放っておけないという気持ちのようなものの表れですね。それが共感の原点だと思っていただくというのがまずは大事です。

浜口　感じるだけではなくて、何かしてあげたいと思うところが大事なんですね。

佐伯　勘違いでもいいんです。自分の好きなタオルを持っていってあげたり、慰めてあげようと思った時に、何かをしないではいられないというのが事の

出発点です。子どもの共感はとても小さい時から見られます。先生が子どもに共感するというのもいいのだけど、困っている子どもに対して思わず手が出るというのが本当だと思う。

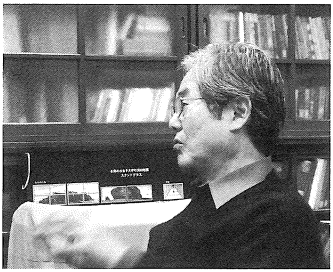
浜口　好調の人に対してより、困っている人に共感を抱くというのはどういうことなんでしょう。相手のうれしい楽しいという気持ちに共感するのは、動物として生きて子孫を繁栄させていくことと直接関係ないということだからでしょうか。

佐伯　そうでしょうね。むしろ、助けてあげるというのは人間が人間になっていく時にものすごく大事。

先日、NHKスペシャルの「ヒューマン：なぜ人間になれたのか」という番組を見ました。アフリカの何万人もいた人類の祖先の人口が、寒冷期に入って数千人に減ってしまった。ところがその寒冷期の時代に、今のホモサピエンスのみは増えている。なぜかというと、部外者に乏しい食べ物を分けていたからなんです。そういうことをやったのは、私たちの先祖だけでした。そのことが黒曜石の分布でわかった。寒冷期前までは半径一〇キロ程度しか分布してなかったのが、寒冷期に入ると七〇キロまで広がっている。餓死寸前の人たちに自ら飢餓寸前でも食べ物を分け与えていたのです。

今回の大震災でも、ボランティア的に助けに行こうという行動が増えて、それが今も持続している。阪神大震災の時に比べると、今回のほうがもっと人々が他者のことに気を遣うようになっている。これは寒冷期の人類と同じで、どん底を経験することによって、他人に対する共感性が高まっているといえるのではないか。

幼稚園でも仲間内同士で助け合うということはよくあり、自分の友達がいじめられると助けに行く。でも相手の子が泣くと気にする。自分の仲間は守れたけれども、そのために他の子が悲しんでいることが気になる。仲良しでない子どもに対しても心が動



▲佐伯 胖氏

くところが共感の芽生えだといえる。そういうことがだんだん広がってくると、ただ自分たちだけがよければそれでいいということにはならなくなる。

浜口　社会性が発揮されて言葉も使えるようになってくると、遠くの人ともコミュニケーションが取れるようになると考えられていますけど、人間というのは、言葉もままならない時期から、自分の仲間だけではない人へのエンパシーを見いだしてるということなんでしょうね。

佐伯　それはむしろ子どものほうがある。だんだん消えていっちゃうんだな。

宮里　それはなぜ消えるんでしょうか。

浜口　社会性がはじめ高くて、だんだん低くなっていくのかもしれない。

佐伯　そういう意味では、小さい子たちの中にあるすごくすてきなものを、大人がもっと見られるようになったほうがいい。期待する子になっているかという視点ではなく、子どもは思いがけなくすごい！ということを見ていきたい。

他人の痛みを共に感じること

浜口　幼稚園で実習して、「子どもは優しい。でも大人の優しさとどこか違う、子どもの優しさは何だろう」と考えて卒論を書いた学生がいました。そして、大人のもっている優しさの基準から子どものことを「優しい」と見るのは、どこかおかしいかもしれないということに気付いていった。よく言いますよね、子ども「なのに」優しいとか……。

▲浜口順子氏

佐伯　子どもを見ていると、他者の痛みを感じるという共感がすごくあることがわかる。自分は苦しんでないけど他人が苦しんでいる時に、その苦しみを放っておけない。小さいころのそういう気持ちを、私たちはだんだん無くしていってしまう。見て見ぬふりをしたりして。それが根源的に違っているんじゃないかと思っている。

シモーヌ・ヴェイユ（フランスの哲学者、社会運動家、サルトルと同時期）が、隣人愛とは何だろうかという問いの中で挙げた説明が今話していることにつながっている。少し紹介しますね。

古くから言い伝えられている聖杯伝説が取り上げられている。聖杯とはキリストが最後の晩餐の時に使った杯。その杯を代々大切にしているという話が古くからある。その一つに、聖なる杯を守っている人が、実は王様なんだけど、戦争に負けたか何かで、ぼろぼろになってしゃべることも動くこともできずに道端に転がっていた。その聖なる杯を次の人に渡せばその人は癒やされる。どういう人に渡せばいいのかということを、王様は前々から知っていた。それは、英訳したもので言うと、What are you going through?「あなたはどんな苦しみを今経験しているんですか」という問いなんです。それを問いかけた人にあげなさいというんです。それまで通りかかった人たちは何をしていたかというと、助けてあげようと言って水をくれたり食べ物を横に置いていったり、いろんなことをしていた。でもその人たちには杯を渡さない。そうではなく、あなたの苦しみは何ですかと問うた人に杯を渡した。

隣人愛とは相手にとって良かれと思うものを与えるのではない。その人自身がどういう苦しみをもっているのかということを、こちらが空っぽになって教えてくださいとかかわること、このことが隣人愛だとシモーヌ・ヴェイユは言っている。これが私のいう共感の原点です。つまり他人の苦しみにwhat are you going through?「いったいあなたはどういうことで苦しいの？」とスポッと入れるということが最も根源的であると思う。

放っておけないという気持ち

宮里　お話を聞いていて、幼稚園の保健室のことを思い出しました。保健室は絵本の部屋も兼ねているので、いろいろな人が集まってくる場所なんだけれども、そこでこんなことがありました。友達とけんかをしてプンプン怒りながら保健室に入ってきた年

中組の子がいたんです。「どうしたの?」って養護の先生がその子の話を聞いていたら、年長組の子がそばで同じように話を聞いていて、聞き終わった時に「あるある、そういうこと。そういう時は、幼稚園の中をぐるっと回ってくるといいよ」と気分転換するアドバイスをしてくれたそうなんです。すごいですよね。このことを他人の痛みや苦しみに対する共感という話を聞いていて思い出しました。

幼稚園では、誰かが泣いたり転んだり、何かが起こるとみんながわっと集まってくるということがよくあります。何か事が起こった時に、気が付くといろいろなクラスの先生たちが「どうしたの?」と集まってくるということもあるんです。

佐伯　いいですねえ。放っておけない。

宮里他　そう、放っておけないんです。

佐伯　それがものすごく重要なことなんですよ。新聞で誰かが言っていたけれど、愛ということの反対は憎しみではない、無関心だという。隣人愛の反対は無関心。共感を語る時には、そういう観点でとらえてもらいたい。

宮里　でも一方で共感は大事と言いながらも、例えば誰かが転んだ時にみんなが駆けつけると、あなたたちは関係ないんだからと声を掛けることもあるんじゃないでしょうか。放っておけない行動をおせっかいととらえて評価しないというのもあるかもしれない。

佐伯　子どもなりの放っておけない気持ちと、大人の知識や経験をもっての放っておけないというのはズレがもちろんある。こちらの考えているやるべきことが思い浮かぶために、邪魔をしないでほしいという思いをもつこともある。時には子どものおせっかいは排除することはあり得るし、緊急時には必要。でも、自分がその子を放っておけない気持ちになったということを、否定されたと思わないようにしてもらいたい。その時でなくていいから、どこかで子どもがその気持ちになったことを見ていてあげてほしい。

浜口　今、感じる大人が減ってきているようにも思

う。保育者はそれこそ共感するような能力を残しておいてほしいけれど、これって高められるのかしら。

佐伯　幼稚園や保育所の現状を言うと、ますます共感性ということが否定されてきている。けがをさせない、トラブルを起こさせないという保育の項目立てがものすごく増えて、がんじがらめになっている。そのことが一番怖い。処方箋的なことをいっぱい知っている保育者が良い保育者だと評価する動きがあるけれど、違うんだという声を上げていってほしい。

保育者養成課程で、マニュアル集のようなもの、トラブルを起こさせないノウハウ集的なものをたたき込まれるような傾向がある。実習指導という時には、ナイーブな学生さんが、ふっと心を動かすことってある。そういうことをすてきだと評価するのか、あなたはこうすべきだったんじゃないの？　ということを指摘するのか、大きな分かれ道になる。

保育者養成の段階から、私たちにとって一番大事なことは、そういう What are you going through? わからないならわからないまま何とか教えてね、という格好で子どもに向かい合うということが大切で、その基本が共感的かかわりというものです。何々をしてあげればいいという共感とは違う。そういうことではなくて、どういうことがいいことなのかわからないと素直に認めながら相手に聞く、相手の思いに近づく、そういう精神って実は学生さんのナイーブな、それこそ先生っぽくなっていない人に意外とあったりする。そういうことを打ち消してしまうような実習指導をすると、だんだん表情の硬いカチンカチンの保育者が出来上がってしまう。そこを崩すことが今非常に重要な段階ではないかと思う。

共感とは一緒にわからなくなること

宮里　共感ということを考えていて、保育の中で使われているそれは、願いのような言葉であって、ゴールの言葉ではないと感じました。その子が見ようとしていたこととか、味わおうとしていたこと、そこで感じていることを私も一緒に感じていたいという願いの言葉なんじゃないか。子どもが感じている

▲宮里暁美氏

ことはどこまでいっても本当にはわからないかもしれない。誤解や勘違いもあるかもしれない。それをわかった上で、あなたが見ようとしていることを私も一緒に見たいと思う願いのような言葉なのかなと思った。

佐伯　共感とは一緒にわからなくなってあげること。だからWhat are you going through?　あなたは何が本当に苦しいことなんでしょうかということを、本当にわからないという思いでかかわることが大事で、あなたはきっとこうなんでしょうという思いでかかわっていくのではないということです。

相手を理解したと思ったとたんに理解していないということになる。だから理解できないということをどこかで受け入れて、いったいこれってどういうことなの？　という感じ、教えてという感じで子どもとかかわる。本当はどうなんだろうと疑問をもちながら、本当のことはわからないということを心のどこかにドスンともちながら、子どもから教わるということが大切なんです。

子どもが見ているところよりも私たちはもう少し先や前を見るから、子どもと同じことを考えるだけではない。子どもが勘違いして考えていたり近視眼的に考えていたりする場合もある。でも本当の子どもの願いはとなると、子ども自身もわかっていないこともあるから、それは一緒に考えていくしかない。子どもに合わせるという話とは違う。

子どもと同じ思いをするというか、同じように感じることが共感ということではない。その子にとってのつらいこと、本当に克服したいこと、子どもが求めていることを共に求めていくという思いでかかわることが、共感ということだと思う。

共感と探求心

浜口　例えば共感的な能力と科学的な探求心が直結する、というようなことがいえたら、現代社会では共感ということがもっと注目されると思うのです。今のカリキュラム論議の中では、子どもの共感性を

どう残すかという話よりも、探求心とか知的な能力を開発するというようなことが注目されやすい。保育者には共感性が大切だということはいわれているけれども、子どもの共感性を育てることがいかに優れた大人になることとつながるのかというところはあまり解明されてないように思いますが。

佐伯　科学や知識というものは「客観的」なものであるという考え方が世の中にあり、そこでは共感など情緒的な話は関係ない、勉強して学ぶしかないんだという教育を日本の社会はつくってきたし、学校ではそういう形で知を与えてきた。

ところが科学者とか本当の探究者の、世界とのかかわり方はそういうふうではない。むしろ共感的に世界とかかわっている。自分なりに放っておけない、人ごとではない事柄として世界とかかわり、結果的に科学が生み出され研究というものが出てくる。その最も深いところの原点には、放っておけないという思いがある。自分なりに何かしなくてはいけなくなり、手を伸ばさざるを得なくなる。そういう衝動のようなものを育てないと、物知りはつくれても本当の探究者は出てこないと思う。

本当の科学者という人がどのように科学を志してきたかということをいろいろと聞いてみると、何かにのめり込んで、その世界の中に自分がはまり込んでしまっている。気になってしょうがない世界の中に自分が入り込んでいくということが、科学の探究の原点にある。小さいころの話を聞くと、昆虫採集とか、虫好きの人がいっぱいいる。無我夢中で虫集めをしている。つまり虫が放っておけない。たまには羽を切っちゃったりするけど、放っておけない。何かそういう世界を小さい時からもっている。正しい知識を覚えさせ練習させるということで教育を考えている人たちには考えを改めてもらうしかない。

幼児期の経験が原点

浜口　それは困っている子どもを放っておけないのと似たようなことなのでしょうか？

佐伯　同じです。気になってしょうがないという世

界があるのは、結果的には生物学者になるとは限らずに哲学者になったりもします。何か小さい時から自分の中側から放っておけない世界というものにいつも悩まされている状態なんです。幼稚園の時の経験というものは、知的探究という意味で人間成長の原点になっている。幼小連携なんかでも学校教育的な知識の与え方を幼児期からしていくと、科学者や本当の探究者は生まれなくなる。粘土でも泥団子でもいい。朝来るたびになで回さざるを得ない。どこの土がいい、どういうふうに水をかけたらいいなんて散々やって、やりまくらないといけない。放っておけない思いをもち続けさせるということが、その子を知的に育てることにつながっていく。

浜口　人間にだけではなくて、ものに共感していくということなんですかね。

佐伯　それはね、少し話がずれているように思うかもしれないが、失敗というものを楽しむということ。What are you going through? が永遠の問いとして常に問われること。子どもが小さな失敗を思いっ切りやっている状態は熱中しているということなんです。大人から見ると「あ、あんなことやってる」という状態。本人も「しまった！　こういうふうにしたほうがよかったかな」と頭を悩ましている状態で、それが、放っておけない世界なんです。

だから、「これは何事か」という探究が常に芽生え続けている世界、失敗が度重なっている世界を大事にしてほしい。失敗させない教育というのが流行っているけれど、私は非常に危険だと思う。

浜口　初めての局面に立ち向かえないということもいわれていますね。

佐伯　失敗をさせない教育が広がり、カリキュラムが浸透すればするほど、その傾向が強まると思う。熱中して遊び、失敗を恐れずに何回でも挑戦するということを子どものころに経験するということがとても大事になる。だから、子どもの様子を見て、失敗をしているなと思ったら楽しみにしてほしい。この子は、この世界を放っておけないんだな、失敗いいねというように、見ていてほしい。

放っておくこと・そっとしておくこと

伊集院　自分ごとというところが、すごく大事かなと感じた。私たち保育者は子どものことを自分のことのように喜ぶ。子どもの成長を自分ごとのように喜ぶ、それがすごく大事なのかなと思った。

佐伯　その時の自分ごとの自分って、以前の自分ではない。その時自分自身がある程度変えられた、そういう自分。それを今までの延長で、「やっぱりか」みたいなところでは本当の共感にはならない。常に新しい自分に成り変わりながら、共感していく。

浜口　だから、放っておくっていうのは、自分の秩序のままでいられるんだけど、放っておけないというのはあえて自分を変えて入っていくことなんですね。自分は変わっちゃうということをあえてする。だから失敗ももちろんある。

▲伊集院理子氏

伊集院　友達のことが気になって友達が困っていると助けてあげようとするんだけれども、かえってこんがらがっちゃうということがあります。そんな時、はじめは「ちょっと放っておいて」と声掛けてたんだけど、その言葉には抵抗があって、「そっとしておいて」という言葉を使うようにした。放っておくこととそっとしておくというのは全然違うんだよと。それを子どもにも伝えたことがある。

佐伯　放っておくという状態は、目が離れている。そっとしておくという状態は、ずっと目が離れていない。それが根本的に大事なこと。そっとしておくというのは、What are you going through?　というのをずっともち続けている状態なんだと思う。放っておくとそっとしておくというかかわり方は似ているようで全然違う。距離を置くという物理的な状態は同じだけれども。その言葉の違いをちゃんと子どもに伝えるのはものすごく大事ですね。

（平成二十四年三月二十二日）

私はこう考える

「共感」って何だろう？

わたしとあなた
―幼児の交渉する言葉に注目して―

鍋島恵美

子どもは、幼稚園に入園すると、家族とは違うあなたという多数の他者性と出会います。その暮らしの中で、もの・こと・ひとに関して他者と交渉せねばならぬことが起こってきます。つまり、幼児期は、コミュニケーションの力の基礎を築く重要な時期といえるでしょう。

私が勤務していた幼稚園では、幼児の「いや」「だめ」といった具体的発話を取り上げ、発話が出る状況、その後の展開についての研究に取り組んでいました。「いや」「だめ」という言葉は拒否や禁止を表し、普通これらの言葉は人間関係を遮断する方向で使われることが多いようにも思われます。しかし逆に、この言葉に注目したことで、①拒否や禁止の言葉が発せられる文脈、②拒否や禁止から展開される交渉、③規範意識の芽生えや、「子どもの言い分」などの論理展開に、発達的な特性が見られることや、教師の援助のありようがわかってきました。

ここでは、その研究の中でも、幼児が遊びを楽しみたい、面白くしたいという情動的な状況下で

立ち上がる交渉場面の特徴的なエピソードを取り上げて、わたしとあなたという関係性の視点から他者と喜怒哀楽の感情を共有する共感について考えてみたいと思います。

三歳児の物の取り合い

A、B、Cと教師がバケツに砂を入れてカレー作りをしている。教師もAと一緒に「カレーは、いかがですか?」と、雲梯で遊んでいるDらに持っていくと、Dは「いただきます」と食べるふりをする。そして、一緒にカレー作りを始める。

Dが「これ使う!」と抜き型を使おうとすると、Aは「だめ、これA君が使ってたし　だめ」と言って貸さない。Dが少し泣きそうになる。教師が「A君が使ってるんだね。Dちゃん、一緒に（同じものを）探しに行こうか」と誘いかけると、Dは安心したのか笑顔になり、教師と一緒にカップを探しに行く。

このように所有権をめぐって取り合いが起こることがよくあります。三歳児では、「いや」「だめ」の言葉が出せる関係を育てることが大切な時期であり、教師は、わたしの主張（自己主張）を受け止めて、個々が自己実現できる援助が大事です。教師はAの「使っていた　貸したくない」という気持ち、Dの「使いたい」気持ちと個々の子どもの気持ちに寄り添います。つまり、教師が共感しているのです。その教師の身の置き方や言葉を通して、子どもは、わたしとは違う他者の思いに触れ、わたしとあなたの関係を拓いていきます。

ところが、四歳児になってくると、教師の援助のもとで交渉をしたりするようになってきます。わたしとあなたの違う世界をつなごうと試みる関係性が出来てくることがわかります。

四歳児の遊び場の取り合い

お弁当の後、E、F、Gがままごとをして遊び

始めた。すると、Hが「そこあかん！　そこ、Hが使ってるねん、あかん」と大きな声で言う。突然、言われて三人は困惑している様子。弁当を食べ終わってHは、紙を切ったりしていたように思ったので、教師が「大きな声で、お友達、びっくりしてはるわ。Hちゃん、机のところで紙で作ってなかった？」と聞くが、Hは「ここ、Hが使ってるの」と言う。

教師は「Hちゃん使ってるの？」と再度聞いた。今度はHが「Hもするのー」と、足をバタバタさせて言う。そこで教師が「Hちゃんもままごとしたいの？」と聞くと、Hは「うん」と言ったので、教師が「一緒にしたら？」と言うと、Hは「入れて」と言った。するとE、F、Gも「いいよ」と言う。教師が「よかったなぁ」と言うと、Hはうれしそうに笑う。そうしてしばらく一緒に遊んでいた。

教師は、まず、占有権を主張するHに困惑する相手の感情を代弁してから、今は使っていないのでは？　と問い返します。そこからHの「ままごとがしたい」気持ちを言葉で引き出し、今度は、その自己実現に向けて「一緒にしたら？」と援助します。そして、「入れて」という言葉とともにHの気持ちが仲間に伝わり、交渉が成立します。

さらに、教師が「よかったなぁ」と、瞬時にHの感情に共感し、言葉で返しています。そのように、教師の心情を伴った言葉を耳にすることは、双方が快の感情を共有することになり、わたしとあなたの間にも共感する関係を生み出していくと考えられます。

そして、そのことがわたしとあなたをつないでもいくことになり、やがて五歳児になると、順番やルールを守るという規範意識が芽生え、自ら「何で？」と理由を問いつつ、自分たちで交渉できるようにもなってきます。

五歳児の三輪車の交替

三輪車をこいでいるIの後ろからJが「Iちゃん替わって」と声を掛ける。しかし、Iは、三輪車をこいで遠くに離れながら「いや」と断る。Jは、Iが替わってくれないので、すぐ近くにいたもう一台の三輪車をこいでいるKに声を掛ける。Jが「替わって」と頼むが、Kも「だめ」と断わる。

Kから断られたので、Jが、もう一度Iに「替わって」と声を掛ける。するとIは、今度は三輪車を止めて「いやや」と言う。Jが「何で？」と聞くが、Iは答えずに三輪車をこいでいく。Jは、離れていくIの三輪車を追いかけて後ろに黙って乗る。Iは、特に気にせずにそのままこいでいる。

再び、後ろからJが「替わって」と声を掛けると、Iは「まだだめ、ちょっとしか乗ってないもん」と答えるので、Jが「替わってって、何回言えばいいの？」と尋ねる。すると、Iは「仕方ないなぁ」とJと交替する。そして、今度はIが「後ろ乗るで」と言うと、Jは「いや」と断る。が、Iは「乗る」と三輪車の後ろに乗る。それを見て三輪車をこぎながらJは「こがんといてや」とIに言うと、Iが「うん」と答える。

三輪車の交替をめぐって、所有権を主張するIと交替を要求するJのせめぎ合いが始まります。交替を要求するJに対して、聞いてはいるものの距離をとってから断るIの行動から、替わりたくない思いが伝わります。

断られたJは交渉の相手を変えますが、そこでも断られ、再びIに交替を要求します。今度はIも三輪車を止めて、「いや」から「いやや」と行動と言葉でいやな思いを強調します。Jは、その理由を「何で？」と問います。にもかかわらず、Iが答えないので実力行使に出ます。

Ｉにも Ｊの替わってほしい気持ちが伝わっているのですが、自分も乗りたいという思いを通すために、占有時間という正当な理由を言います。その思いを受けたＪは、「替わってと何回言えばいいの？」と、頼む言葉の回数で交渉します。そこまで言われるとＪの替わってほしい強い思いに押されて、「仕方ないなぁ」とＩが交替に応じるのです。それでも乗っていたい自分の気持ちもあり、「乗るで」と言葉で断ってから後ろに乗っていきます。ＪもＩの気持ちに共感でき、Ｉの行動は受容するものの、「こがんといて」と、乗り手は自分であることを主張するのです。逆にＩもＪの気持ちに共感して、「うん」と受け入れていきます。ＩもＪも、交渉を重ねる中でお互いの感情を共有しつつ相手に譲歩し、それなりに納得していきます。

幼児期は、コミュニケーションの力を獲得する重要な時期ですが、その力は、さまざまな感情のうねり（共感）を通したやりとりの中で、自他をつなぐ言葉として獲得されていく様子がよくわかるのではないでしょうか。

（臨床発達心理士）

▲抱き合って喜ぶ
秋の自然に抱かれ

参考文献

1　岩田純一『子どもの発達の理解から保育へ』ミネルヴァ書房　二〇一一年

2　森山卓郎・鍋島惠美他「遊びの広がり・深まりと仲間づくり ― いや・だめ（あかん）の言葉に着目して ―」京都教育大学附属幼稚園研究紀要　二〇一〇年

3　森山卓郎・鍋島惠美他「幼児のコミュニケーションと談話標識〈じゃあ〉」京都教育大学紀要　二〇一二年

私はこう考える

「共感」って何だろう？

絵を通した共感体験

泉谷淑夫

絵描きの常で、私も物心がついたころから絵を描くのが好きで、とにかく絵を描いていると時間がたつのを忘れてしまうようなところがあった。

そんな子どもも中学校に進み受験期を迎えるようになると、絵を好きなことが相対化されて、得意なことではあっても将来の進路としては意識されないようになっていく。高校に進み、初めて油絵を描くようになるが、自分の描きたい世界というものはまだ見えていなかった。また、それまで美術の教科書などで、幾つかの好きな絵とは出会っていたものの、それほど強い印象を受けるということもなかった。

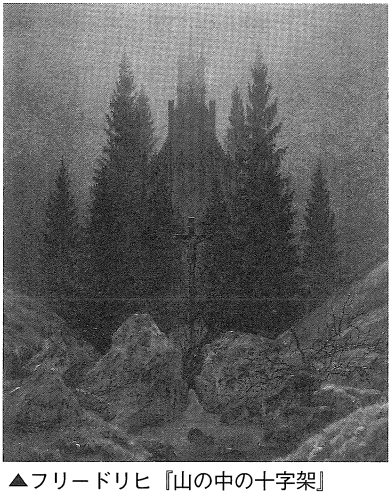
一枚の絵との出会い

ところが、高校二年の時の教科書に小さく載っていた一枚の風景画に、私は強烈な出会いを感じることとなる。手前の岩と十字架、中景の樅（もみ）の木と奥の教会が、シンメトリーの構図にまとめられている緊張感みなぎる不思議な絵であった。この絵を見たとたん、私は自分が求めていた絵の世界を悟ったのである。正確にいえば、白黒の小さな図版を通して、私はこの絵の作者の表現意図と方

法にいたく共感したのである。何か見てはいけないものを見てしまったような感覚と、早く自分もこのような世界を描いてみたいという思いが私の中で交錯していた。

この時私が出会ってしまった絵は、ドイツ・ロマン派のフリードリヒという画家の『山の中の十字架』である。この作家の絵が教科書に載ることは今でもほとんどないし、日本でのまとまった展覧会も一九七八年の一度きりなので、名前も作品もあまり知られていない。そうなると、より愛着が増すものである。

フリードリヒの絵の特色は、強いメッセージ性をもち、見る者の想像力を強く刺激することである。そのようなたぐいの絵を私はそれまで見たことがなかったので、なおさら強烈な出会いを感じたのだろう。と同時に、思春期と受験勉強の狭間でもがきながらも少しずつ育まれていた不安定な自意識が、この絵を触媒として一挙に解き放たれたということなのかもしれない。人は最初から自分の考え方や生き方に自信をもっているわけではない。共感できるものと出会うことによって、自分を発見し自信のかけらが芽生えるのではないだろうか。



▲フリードリヒ『山の中の十字架』
「ドイツ・ロマン派の時代展　ナザレ派・フリードリヒ・ベックリン」
（1990年東京都庭園美術館にて開催）
図録（毎日新聞社）P40より引用

芸術世界の「表現連鎖」

この経験を改めて考えてみると、フリードリヒの絵と私の内面世界の状況が「啐啄同時」的に遭遇したことに気付く。高二という不安定ながらも自意識の発露を強く求めていた時代でなければ、フリードリヒの絵の世界にこれほど共感するということもなかったかもしれない。それまでも絵はずっと私を支え続けてきたわけであるが、具体的に表現したい世界が見つからなければ、生涯絵を描き続けていく必然性はなくなる。しかし今も人生の中心に絵を据え続けているということは、いかに最初の共感体験が大きかったかということである。また、それほどまでに芸術は他者の人生に影響を与えるものなのである。

実は、芸術の世界には時空を超えた影響関係がしばしば見受けられる。例えば、かのゴッホは独学で絵を学んだが、生涯ミレーを慕い、ミレーを「北極星」として、自分の進むべき道を歩んでいった。このように作家と作家が作品を通してつながる系譜は、まさに芸術世界における「表現連鎖」と呼ぶにふさわしいものであり、「芸術が芸術を生む」という壮大なドラマの根底に、表現の内容や方法に対する深い共感があることは間違いない。だからこそ私は大学時代に、自分が素直に共感できる画家たちを探し、その系譜を作ることに夢中になった。その作業は必然的に美術史を踏破する学習となり、結果としてより多くの作品と出会い、共感の幅を広げるという意味で、後に美術教育に携わる際の大きな「財産」ともなったのである。

鑑賞における共感

その美術教育の中で私は鑑賞教育を大変重視しているが、鑑賞教育の場合も「共感」は重要なキーワードである。なぜなら私が鑑賞への導入で大事にしているものが「好き嫌い」の感覚で、これ

は鑑賞者を作品に対して正直にさせるという意味で、やがて作品への共感を体験させるためのステップなのである。

子どもから大人になるにつれて、人は正直な気持ちを胸の中にしまい込むようになる。そうしているうちに自分を見失ってしまうこともある。しかし、優れた芸術には「自己を発見させる」力がある。世間の評価で絵を見るのではなく、自分に正直に絵と対峙していくうちに、自分というものが見えてくるのが鑑賞の醍醐味である。芸術は誰にでも開かれているのではなく、心を開いた者に対して開かれるのであり、その時に共感という素晴らしい感覚を味わうことができるのではないだろうか。

名画と幼児の組み合わせ

以上の話が幼児教育とどのようにかかわるのかは、専門家ではない私にはよくわからない。ただ一ついえることは、自我の芽生える幼児期にも共感体験は可能なはずである。何よりも幼児は好奇心旺盛で正直である。だからこそいろいろなものに反応するし、夢中にもなる。すでに一部には幼児に名画鑑賞を試み、幼児たちの優れた直観力を引き出している興味深い例もある。

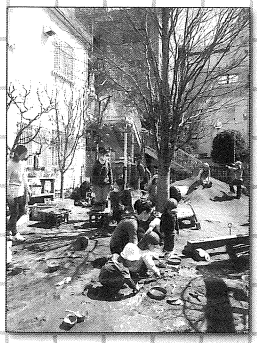
とかく私たちは教育においても制度的な発想に陥りがちである。例えば「絵本は子どものもの」と思い込んで、大人が絵本を楽しむことを忘れてしまうように、名画の場合は逆に「名画は大人のもの」と思い込んで、幼児にはまだ早いとしまい込まないでほしいものである。

「名画と幼児」という意外な組み合わせには、きっと予想外の展開が待ち構えているような気がする。

（岡山大学）

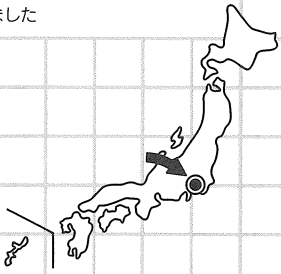
バオバブ保育園ちいさな家　東京都多摩市

シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第７回は東京都多摩市にあるバオバブ保育園ちいさな家。０歳から２歳までの小さな子どもたちの暮らしを支える場を訪れました



バオバブ保育園ちいさな家は、新宿から京王線で約三十分、聖蹟桜ヶ丘駅から徒歩三分の所にある。駅前の大きなショッピングモールや高層マンションが保育園の背景のように建ち並んでいるのだが、保育園の敷地に一歩入ると、そんな街の様子を忘れるほどに、静かでゆったりとした時間が流れていた。

ここ、バオバブ保育園ちいさな家には、〇・一・二歳の子どもが約三十人、暮らしている。ちいさな家から徒歩十分ほどの所にバオバブ保育園（「おおきな家」と呼ばれる）があり、三歳からはそこへ通うことが想定されている。ちいさな家はその名のとおり規模が小さく、小さな子どもたちの暮らしの場という雰囲気がある。

◆保育の目標に込められた保育者の願い

一九七三年に開設されたバオバブ保育園に始まり、一九九八年に若葉台バオバブ保育園、二〇〇一年にここ、バオバブ保育園ちいさな家、二〇〇六年にバオバブ霧が丘保育園が誕生した。それぞれの園

には、それぞれの個性があるものの、四園を支えるバオバブ保育園としての基盤がどっしりとある。

子どもたちが、

・自分を大切に思える人

・柔らかに開かれた心をもち、さまざまな人と共に生きていける人

に育っていくことを願い、保護者と共に子育てをすすめる。

この保育目標は、「今の子どもたちに育ってほしい姿は何だろうと、これまで何度も検討を重ね、書き換えてきた」ものだと、遠山洋一園長から話を伺った。いつも、そこにいる子どもたちを見つめ、子どもたちの育ちを願う気持ちが伝わってくる。

◆思い思いに過ごす庭

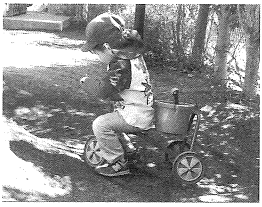
門を入るとすぐ右手に園庭がある。園庭は全面にたっぷりと砂が敷かれ、中央には小さな山があった。園庭では、子どもたちがそれぞれに土に向かい、水に向かい、山に向かい、黙々と遊んでいる。

私たちも、そっと腰を下ろして見ていると、子どもたちが水をたたく音やジャンプして土をける音が聞こえるほど静かだということに気付く。

ふと、中央の大きな木を囲むベンチを見ると、白い帽子の男の子が、三月の暖かい陽を浴び、靴を触っているうちにウトウトし始めた。時々、カクッと頭が揺れる。そのたびに、ちょっと目を開けるのだが、またすぐにウトウト……。この園庭の心地よさを物語っている。

その奥では、地面に

こぼれたバケツの水に手を入れて、ひたひた、ピチャピチャと感触を確かめる姿があった。シャベルで水をすくって、大胆にひざにかけながら、じっとその水の行方をたどる目が真剣だ。もう、顔も手も足もお尻も、泥水でびしょびしょだが、そんなことはお構いなし。ただただ、水と砂に向かっている。保育者は、少し離れた所でそっと見守っていて、そのまなざしがとても温かい。



三輪車に乗る子どもは、それぞれに荷物を載せて運んだり、車輪の動きにじっと身を任せたりしている。そして、築山の周りを走らせているうちに、何台かの三輪車が連なっていく。一人ひとりが自分のやりたいことに向かいながらも、そこに暮らしている人たちの姿を互いに見ていて、自然に惹かれ合い、つながっていく姿があった。

◆家族団らんのような温かい雰囲気の中で

「そろそろ」と声が掛かり、シャワーを浴び、手を洗い、室内に上がっていく子どもたち。園庭から一人減り、二人減り……、気が付くと残っているのは二歳児のみとなっていた。一歳児の後を追っていくと、小さな体をいっぱいに使って、階段を丁寧に一段一段登っている。二階に上がると、大きな山を登ったような達成感。「すごい?」と得意げに振り返る笑顔がとてもいとおしい。

○歳児クラスでは、昼食をとり始めていた。これからの食事を楽しみに自らエプロンを着けようとしている姿や、スプーンを握り次々にスープを口に運ぶ懸命な姿に、生き生きとした力を感じる。

一歳になったばかりの小さな子どもが「ん」と言うと、保育者が「おかわり?」と尋ねる。そして、

子どもが「ん」と言い、保育者がスープ皿を手にすると、子どもはうれしそうに、満面の笑みを浮かべる。小さな子どもと保育者のやりとりが、ほほ笑ましい。一つのテーブルを三人の子どもと一人の保育者が囲んでいる様子は、家族団らんのひとときを思わせる、温かい雰囲気だった。

次に一歳児クラスをのぞくと、静かに食べる子どもたちの様子に、保育者が「いつもはとってもにぎやかなんですが」と言葉を添えてくれる。

私たちも少し遠慮して、離れた所からこっそりとのぞかせてもらうが、大きな背中を丸めても、突然の訪問者の存在は大きくて、申し訳ないような気持ちになる。小さな子どもたちの暮らしの繊細さを感じ、早々に退室することにした。

◆「ちいさな家」の雰囲気を創り出しているモノ

昼食の様子をそっとのぞいている時に、思わず「おひつ！」と驚きを声に出してしまった。炊きたてのご飯が、おひつに入って保育室に届けられていたのだ。木のワゴンに載せられて届くご飯、配膳用の小さな座卓に並べられたおひつにお鍋、ホーローのヤカン。それらのモノから醸し出される昔懐かしいような家庭的な雰囲気は、きっと子どもたちだけでなく、その両親をもタイムスリップさせ、安心させてくれるものに違いない。

また、保育室全体からも、安心感が得られる。木を基調にした落ち着いた保育室に、大きな窓から暖

かい光が差している。天井は高く、照明には自然素材の布が掛けられていて、柔らかい雰囲気になっている。壁や天井には、ひもが何本も掛けられていて、その先に洗濯バサミが付いている。そこに提げられている子どもたちの作品や遊びの道具が、保育室の雰囲気を一層柔らかく、温かくするオブジェになっている。

◆地域の子育てを支える大きなバオバブの木

最後に、親子サロン「びーだま」に案内してもらった。園舎内のホールが、通常は地域子育てひろばとして地域に開放されており、〇歳から二歳までの親子が遊びに来ている。ちょうどこちらでも昼食の時間で、座卓に座り、各自が持ってきたお弁当を広げて、和やかに食べ始めていた。

その中で、一人の男の子が、「ここでお昼ご飯を食べたかった」と泣いて、なかなか気持ちが治まらない。それを見て、スタッフが、「買ってきたら?」と声を掛けた。母親が大急ぎでお昼ご飯を買いに出かけるその間、その子どもは泣いていたことを忘れたかのようにスタッフと共にパズルで遊んで待っていた。親も子も安心して居られる場になっているということがわかる。

室内には、さまざまなオブジェがある。天井には風を感じる手作りのモビール、壁には保育者や母親たちの手作りの装飾や絵が飾られている。中でも目を引くのは、色とりどりの葉っぱが生い茂る大

きなバオバブの木の壁掛けだ。よく見ると、葉っぱには名前が書かれている。この「びーだま」の利用者の名前である。これを見ると、バオバブ保育園が、地域に根付き、大きな幹と枝で地域の人たちを支え、つながりを広げていることを感じる。

小さな子どもの暮らしを支える、大きなバオバブの木。地域の中にあるその存在の大切さと、そこから紡ぎ出される生活の豊かさを感じた。

そして、遠山園長先生のお話を伺っていると、柔らかく静かな語り口でありながら、言葉一つひとつの重みがあり、揺るぎない信念を感じる。バオバブ保育園をつくり、支え続ける遠山園長先生の存在そのものに、バオバブの木のイメージが重なった。

訪問者／伊集院・川辺・宮里

文／川辺尚子

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

— 訪問メモ —

訪問時期：2012年3月
訪問場所：社会福祉法人バオバブ保育の会
　　バオバブ保育園ちいさな家

〔住所〕 東京都多摩市一ノ宮 3-1-16
〔電話〕 042-375-4701
〔FAX〕 042-374-5473

実践研究
私の保育ノートから

子どもとミュージカル

榊原友里

私は大学学部三年生の春に愛育養護学校に出会いました。それから二年間、実習生として週に一回愛育養護学校に通い、二〇〇九年から現在に至るまでは非常勤講師として子どもたちと過ごしています。愛育養護学校とは、東京都心に位置する、幼稚部と小学部からなる私立の特別支援学校です。

初めの実習の一年間を通して、私はこの学校の子どもたちの感性の豊かさに何度も驚かされました。誰かが何か楽器を鳴らせば、そこに誰かがのって楽器を鳴らし、身体を動かし、次々と子どもが集まってきて、お祭りのような場ができる。そこに絵の具があれば、画用紙に思いのままに色をちりばめたり、水に絵の具が溶けるさまをじっと見つめる。そこには保育者の支えもあるのですが、私は、自分の心の動きをすっと表現へと変えられる子どもたちをうらやましく思ったりもしました。

子どもの遊びとミュージカル

ある日、こんなことがありました。その日は月に一回学校に来る、音楽のアートティーチャーがみえている日でした。当時年長さんだったAちゃんと私は、アートティーチャーがピアノを奏でる中、歌ったり踊ったりして遊んでいました。Aちゃんは音楽

がとても好きな女の子です。そのうちアートティーチャーはディズニー映画の曲を弾くようになりました。するとAちゃんは「この曲、何？」と聞き、「『三匹のこぶた』だよ」と言われれば、自分はこぶた、私を狼（おおかみ）として「三匹のこぶた」ごっこを展開するというように、音楽に合わせてごっこ遊びをするようになりました。それはとても楽しい時間でした。

その時、私は自分の幼い日を思い出しました。私はAちゃんと同じく音楽が好きで、歌ったり踊ったりすることが大好きな子どもでした。また、母の舞台好きの影響で、小さいころからミュージカル等の舞台を観に連れていってもらっては、家に帰って自作自演のミュージカルを上演していました。Aちゃんとの遊びから、私はそんな幼い日の楽しい時間を思い出したのです。そしてそのまま大きくなった私は、大学ではミュージカルサークルに入り、現在に至るまで歌ったり踊ったり演じたりということを自己表現の一つとしてきました。

私はAちゃんと遊んでいて、私が表現活動の中で特にミュージカルを好むのは、きっと子どものころに胸を弾ませた遊びに一番近いからなのではないかと思いました。ミュージカルは演劇の一種で、演劇、音楽、舞踊、美術、文学などの文化が一体となった総合芸術と呼ばれるものです。それは、歌いながら踊り、すっと自分以外の何かになることができる子どもにとても近い表現形式であると私は思いました。

そこから私は、「この学校の子どもたちにミュージカルを出会わせてみたい」と考えるようになりました。そこで学校側に提案し、職員の皆さんと相談を重ねて、ミュージカルを実践することになりました。二〇〇九年の九月に一回上演し、その反省を踏まえて、二〇一〇年九月には学校の授業の一つとしてこのミュージカルを実践するに至りました。

ミュージカル実現に向けて

私はミュージカルの構想を考える際、せっかくミ

ュージカルに出会うのなら、子どもたちに「観る」だけではなくて、「体験」してみてほしいと考え、「観客参加型ミュージカル」という形をとることにしました。それは、「観ていること」も「自分もキャストと一緒に動くこと」もでき、一人ひとりの子どものあり方が尊重できるミュージカルの形です。

そして、「できるだけ質の高いものを子どもたちに見せたい」という思いから、ミュージカルの登場人物を演じるキャストは、ダンスや演劇等の舞台経験を有する私の仲間に務めてもらうことにしました。

ミュージカルの題材はAちゃんとの遊びの中にも出てきた「ピーターパン」にしました。このお話の大筋は、ウェンディという女の子が、ネバーランドという夢の国から来たピーターパンと、ネバーランドを冒険するというものです。子どもたちはウェンディと同じ心境でネバーランドを冒険できるのではないかと考え、この作品を選びました。

しかし、話の内容はこのミュージカルのために私が考えました。まず、ウェンディが子どもたちに「ピーターパン」のお話を読み聞かせようとしているところに、ピーターが現れます。そしてピーターはウェンディと子どもたちに金の粉を振り掛け、空の飛び方を教え、みんなで空を飛んでネバーランドへ向かいます。ネバーランドでは、インディアンの村でダンスを見て、人魚の泉ではみんなで踊ることを楽しみます。そして、フック船長とピーターの決闘があり、みんなでピーターを応援します。無事にピーターが勝利を収めた後、みんなで元の世界へ飛んで帰り、ピーターは再びネバーランドへ帰っていくというところで物語が終わります。

劇中の曲にはディズニー映画「ピーターパン」の曲やその他のディズニーの曲、ブロードウェイミュージカル「ピーターパン」の中の曲を抜粋し、使用しました。ミュージカルの各場面に歌やダンスが盛り込まれています。そしてウェンディは普段かかわりがある私が演じ、子どもがよりミュージカルに参加しやすくなることを狙いました。

このミュージカルで一番私が大切にしていたこと

は、「一人ひとりのミュージカルとのかかわりを最大限に尊重する」ということです。そのために、ミュージカルの構成の際にも練習の際にも、常に子ども一人ひとりの動きを予想して取り組んでいました。

脚本等はあらかじめ決めてあるのですが、それはあくまで基盤として用意してあるもので、当日の動きは子どもに合わせるということをキャストも保育者も共通の理解としていました。また子どもの反応にきちんとキャストが応えることができるように、キャストを務める人たちには本番前に実習に入っていただきました。そして保育者は、場面の見通しをもって子どもとその場を楽しめるように、ミュージカルの内容や進行についてのミーティングを丁寧にもち、保育者自身も「この場面では子どもとこうやって参加してみたいな。子どもはどんな反応をするのかな」という期待をもって当日に臨みました。

私自身、当日子どもたちから何が出てくるかというのはとても楽しみでもあり、またちょっとした緊張感もありました。

ミュージカル当日

この日は朝から、「今日は何かが起こる」というワクワク感が学校中にあふれていました。それは、大人側のこの日への期待や思いが生み出したものであったように思います。事前にミュージカルで使う曲を私が子どもたちとトランポリンを跳ぶ際に歌っていたこともあり、朝から「今日はピーターパンやる」と言って歌を歌いながら元気にトランポリンを跳ぶ子もいました。また「あなたは何役なの？」とキャストを務める人、一人ひとりに聞いてまわる子もいました。いつも一日の大半を学外に出かけて過ごす子どもも、ミュージカルの時間までには自分から学校に戻ってきました。このような子どもの姿から、子どもたち一人ひとりがお昼ご飯後のミュージカルに気持ちを向けて過ごしていることがわかりました。

ミュージカルは十二時半から十三時の三十分間、

上演しました。そして、開演五分前には、ミュージカルを上演するホールにミュージカルで流す曲を流していました。準備の整った子どもは、ホールの思い思いの場所に座ったり、曲の中で早速踊ったりしながらミュージカルが始まるのを待ちました。

そして、ミュージカルが始まりました。劇中で一番初めにウェンディとして私が登場すると、それまでざわざわしていた子どもや大人の意識がぐっと私に集まり、場の集中力が一気に高まったことを感じました。子どもたちの方を見ると、みんなの目が期待にあふれていることを感じ、私も身が引き締まる思いがしました。

そしてピーターが登場すると、どこからともなく歓声が上がりました。場の集中が良い意味で和らいだ瞬間でした。ピーターが子どもたちに魔法の粉（金のテープを細かく切ったもの）を掛けると、子どもたちの目がさらに輝きました。そしてピーターの「みんなもおいで、一緒に飛ぼうよ」という誘いに少し照れたり戸惑いながらも、子どもたちは前に出てきました。子どもの気持ちが動いた時、保育者は子どもの身体を支えて一緒に動いたり、気持ちを後押ししたりしました。そしてキャストもまた、子どもに直接語りかけ、子どもの手をすっととって動きました。本当に、みんなでネバーランドへ飛び立つ気持ちになりました。

インディアンのダンスでは、見ていても身体が動きだすようで、思わず前に出てきてキャストにつられて足踏みをする子どももいました。そして人魚のシーンでは大人も子どもも一緒になって、音楽の中、思い思いに踊りました。子どもたち一人ひとりの表情から、身体だけではなく心も踊っていることを感じました。そしてフック船長とピーターの対決の場面では、フック船長に少しドキドキしながら二人の決闘を見守り、ピーターが勝利した時に、一気に緊張が勝利の喜びに変わったことを感じました。

ミュージカルの時間は本当に子どもも大人も夢の国「ネバーランド」で一緒に過ごしたような時間となりました。

ミュージカルが終わった後も、キャストはその場に残り、子ども一人ひとりとの出会いを大事にしました。ミュージカルの時にはドキドキ見ていたフック船長に自分から決闘を挑む子どもも何人もいました。またミュージカルの余韻の中、キャストと踊ることを楽しんだり、おしゃべりを楽しむ子どももいました。

私はミュージカルを通して、この子はこんな場面に心惹かれるんだ、こんなことが好きなんだというように、新たな子どもの姿にも出会うことができました。また子どもたちは私の予想以上に、ミュージカルに各々のあり方で参加し、楽しんでくれました。

ミュージカルを終えて

子どもたちのきらきらした目、普段以上にいきいきとした姿、ホールを満たしたあの一体感と熱気を私は忘れることはないでしょう。子どもも大人も本当にいい顔をしていました。

ミュージカル以降、劇中で歌われた曲は毎日子どもや保育者によって歌われるようになりました。また、自分でミュージカルをやりだす子も出てきました。そんな子どもの姿から、子ども一人ひとりの中に各々のあり方でミュージカルの時間が息づいていることを私は感じました。

演劇は人が非現実を現実の中に表現させる方法として生み出したものです。その力を利用して、あえて日常の保育の中に非現実を持ち込む意義はあるのではないでしょうか？　そこでは子どもも大人も一緒になってその世界を生き、一緒に心を動かす体験ができます。また、子どもの遊びに近いミュージカルという総合芸術が、子どもの表現の幅をさらに広げてくれることもあります。そして何より、現実の中の非現実な時間が日常をさらに活気づけることを、この実践を通して私は感じました。

（お茶の水女子大学大学院生）

実践研究
私の保育ノートから

子どもと過ごした宝物の生活

保坂悠希

私は今回、大学卒業後から今まで幼稚園に勤めていた六年間を振り返ってみることにした。

大好きな子どもたちとの日々は毎日が発見で、ワクワクするようなことにたくさん出会わせてもらった貴重な時間だった。子どもたちと生活していると、心も体もいつもフル活動で元気いっぱいだった。また、子どもたちのそばにいると、多くのことに気付かされたり、改めて考えさせられたりすることにあふれていた。悩んだり、出勤する足が重い日もあったけれど、子どもたちの顔を見るとそれまでの気持ちがどこかへ飛んで行ってしまうようなことが何度もあった。それは、とっても不思議だったけれど、こんなに自分は子どもたちとの生活が楽しくて大好きなのだなと感じ、力になったのを覚えている。

家族に子どもたちとの出来事を話したり、同僚と熱く語ったり相談し合ったりすることができたのも、心強い支えであり、保育する活力となった。私は、ありがたい環境で保育ができていたのだなと改めて感じている。周囲の人には感謝の思いでいっぱいだ。

最初の三年間は、途中、年中でクラス替えがあったものの、もち上がりで見させてもらうことができた。何もかもが初めての体験で不安も多く反省することもたくさんあったが、その反面、何より子どもと同じで、体験することすべてが新鮮でワクワク、

ドキドキ、一緒に考えて歩んでいくのが楽しかった。振り返ると、濃い三年間だったなと思う。

一年目 ―「穴」じゃなくて「鼻」―

就職して一年目、三歳児の担任になって間もない四月のこと。砂場で子どもたちと過ごしていると、それを見ていたN君がシャベルを持ち、走って私の所へ来た。すると「あな！　あな～！」と私の前で必死にシャベルをブンブン振って地面を指したのだ。

私は〝穴を掘ってほしいのかな〟〝そんなに叫ぶほど強い思いなんだな〟と感じ、せっかくなら驚くくらい大きな穴を掘っちゃおう！　と夢中で穴を掘り始めた。するとN君もしゃがみ込み、どんどんと大きくなる穴をじっと見ていた。ふとN君の顔を見ると、何とも困った表情をしているではないか……。

〝違ったかな〟〝どうすればよかったかな〟と思いをめぐらせつつN君を見ると、鼻の下を伸ばしたり縮めたりしながらピクピクさせていた。その時にハッと気付いた。N君は私に「穴」を掘ってほしかったのではなく、「鼻」をかんでほしかったのだ。

私は慌ててティッシュでN君の鼻をかみながら、すぐに気付けなかったことを謝った。

一年目は、自分が夢中なあまり、こんな失敗も多々あったように思う。〝この子はどう思っているのかな〟〝こうしたいのかな〟と、とにかく目の前にいる子どもと一生懸命に過ごし、やりとりした。これは、一年目だけではなく、ずっとそうだった。しかし、最初に三歳児を見させていただいたことはとても大きかった。自分の言葉だけでは伝えきれない強い思いが、さまざまな表現方法で表される。全身で表現したり、ふとした表情やしぐさを見せたり。一人ひとりをじっくり見つめ、想像して同じ気持ちになることを教えてもらった一年だったように思う。

二年目 ―お弁当を太陽の下で食べる―

ポカポカ春の日差しが気持ちいい日のことだった。

女の子たちが「今日はピクニックしたくなっちゃう〜！」と人工芝が敷いてある二階の広場（芝生広場）にござを運び、せっせとごっこ遊びの準備をしていた。また、男の子たちも「旅に出るんだ！」と言って、風呂敷でごちそうを包むと、私に肩から斜めに背負わせてほしいと、旅支度を始めた。保育室にいるのがもったいない天気に、子どもたちも自然と感じるものがあったのだろう。

春の風が心地よく、子どもたちと一緒に芝生に寝転んでみると大きな青い空と日差しが気持ちよかった。そこから見える八重桜がきれいで、まさにお花見だった。「よしっ！　今日はここでお弁当を食べよう！」。子どもたちに声を掛けると、あっという間にクラス中に広まり、お花見の支度が始まった。

いざ食べ始めると、だんだんと日差しは強まり暑いくらいになってきた。子どもたちは「暑すぎる〜」「夏が来た！」と、頭にお弁当袋を乗せたり、上着をかぶったりし始めた。慌てて日陰に入るよう声を掛けたが、芝生広場は日陰が少ししかなく、全員が入るのには狭かった。子どもたちは詰めたり譲り合ったりしてくれたが、予想外の暑さにどうしようかと思い、子どもたちに相談すると、暑くてもお部屋に帰らずこのまま食べたい！　ということだった。

するとその時、先に食べ終わった男の子たちが食べている仲間の所へやって来て、仁王立ちになった。「俺らがこうやって立っているから食べていいよ！」と言う。ふと見るとちょうど食べている人に影が出来ている。そして、また別の子は、部屋からピアノカバー（綿の薄手な素材）を持ってきて影を作り、暑くないようにしようと頑張ってくれていた。

子どもたちが自分で考えて工夫したこと、仲間を思って行動してくれたことに、子どもたちの力を感じた。この時、いつも自分が先に立ってやっていくのではなく、時には子どもと一緒に並んで考えてみたり、子どもの後からついて行ったりしてもいいのだなと気付かされた。また、子どもたちの発想やひらめきにはいつも驚かされたり、感動させられたり、とても魅力的で心が揺さぶられた。

三年目　―クラスの仲間の一人としての保育者―

また、年長の春にはこんな失敗をして子どもたちに助けてもらったことがあった。

毎日お昼は、お家の人に作ってもらったお弁当で、飲み物は麦茶を一人ひとりのコップに注いでいた。年長に進級したばかりで、新しい保育室で食べるお弁当はいつも以上に盛り上がっていた。「年長おめでとう！」と麦茶で乾杯する子どもたちの姿があり、子どもたちにとって〝年長さんになる〟ということがこんなにもうれしくて大きいことなのだなと強く感じた。私も席に座ると仲間に入れてもらい、一緒に乾杯をすると……おっちょこちょいの私は麦茶をズボンにこぼしてしまったのだ。まるでお漏らしをしてしまったようで、恥ずかしさから思わず手で顔を覆った。

「何やってるの～」「早く着替えておいでよ！」と言う子どもたちに思わず大笑いしながら「先生恥ずかしくてお部屋から出られないよ。どうしよう……」と困って言うと、T君がひらめいたようにピアノカバーを取りに行って、「これを腰に巻いて行けば大丈夫！」と渡してくれたのだ。

私はいつもこんなふうに子どもたちに助けてもらってばかりだった。クラスの一員として子どもと一緒に思い切り過ごしたり、子どもに頼って助けてもらったり、時には先生としてぐいっと引っ張ってみたり……。初めて受けもった年長では、子どもたちと考えたり話し合ったりして一緒に生活をつくり上げる楽しさを知ったように思う。

三年目　―リレーを通して見えたこと―

運動会（十月）では、今まで毎年見てあこがれてきたリレーを自分たちがすることになり、遊んでいく過程の中でも子どもたちの楽しい発想や姿に一緒に考えさせられた。

年長は二クラスある。しかし、うちのクラスはい

つも勝てず、どうしたら勝てるのか、リレーをするたびに自分たちで集まって作戦会議をしていた。全員が輪になり肩を寄せ合って、考えを伝え合っていて真剣だった。「もっとこうやって腕を振って走ればいいんだよ」「鳥みたいに広げて走ってみれば？」とやって見せたり、「手の指をピンとすれば速いよ」「走るのを男の子、女の子の順番にしてみたら？」と考えが出たり、中には「走る途中にバナナの皮を置いておけばいいんだよ！　そうしたら、転ぶから抜かせるよ！」という面白い意見もあった。クラスが笑いに包まれ温かな雰囲気の中、「そうすると自分たちも転んでしまうよ」「バナナいつ食べるんだ～！」とユーモアも交えつつ、真剣に考え、やりとりする子どもたちの真っすぐな様子がかわいらしかった。

子どもたちは〝勝つこと〟にとてもこだわり、「最初に足の速い人が走ったほうがいい」「アンカーが速いと勝てる」と、速さで仲間のことを見ている様子があり、私は、走ることが得意でない人の表情がとても気になっていた。もちろん勝ちたいという思いも大切だけれど、結果ではなく、それまでの過程を大切にしたいなと思った。絵を描くのが好きな人もいれば、電車に詳しい人もいる、踊ることが好きな人もいればドキドキして苦手な人もいる。運動会だけではなく、日々のさまざまな場面で一人ひとりが生き生きと輝けたらいいなと思って保育していた。

私は自分の思いを子どもたちに伝えてみることにした。トップバッターやアンカーも大切だけれど、走ることが苦手だったりドキドキ緊張してしまう人を助けたりつなぐことのできる〝真ん中で走る人〟も大切だという思いも知ってほしかったのだ。

当日は、驚くことに初めて一位になり、子どもはもちろん私もうれしかったが、それ以上に運動会が終わってからの遊びが楽しかった。年少、年中の小さな子どもたちも加わってリレーごっこが園庭で繰り広げられた。自分のバトンが欲しい年少さんにラップの芯に色を塗りバトンを作ってあげたり、どこを走ればいいのか迷子になる年少さんと手をつないで走ってあげるような姿も見られた。

◇　◇　◇

その後、園児数が減った年があり、私は、今までの三十名以上とは違う、一クラス十七名という少人数のクラスを受けもつことになった。

少人数の保育で学ぶこともたくさんあった。それまでは、少ない人数だと、より深くじっくり見ることができたり、かかわって遊べるのだろうなと思っていた。しかしその反面、遊びも盛り上がりに欠けたり、友達関係もなかなか変化せず難しい面もあった。隣のクラスの先生と日々考えて、ままごとコーナーを一つにして一緒に遊べるような環境にしたり、二クラス一緒にお弁当を食べたりと、学年で大きなクラスとして生活してみたりもした。

また、一年を通してたくさん外へ散歩に出かけた。頻繁に散歩に出かけるうちに、生活の中で園の周囲の環境や地域のことにも目を向ける子どもたちの姿があった。〝面白いマークの標識がある〟〝ドングリが落ちていたよ〟〝カルガモの赤ちゃんが生まれて、昨日公園の池で見つけた〟と、日常の会話から子どもたちが今、興味をもっていることや心動かされたことを知り、それをきっかけに出かけることもあった。

秋には年中さんと一緒に手をつないでドングリを拾いに行った。その時には、自分たちが小さい子を守るんだという子どもの思いを感じたり、横断歩道で声を掛けてくれたおばあさんにドングリをあげたりする優しい姿が見られた。また、違う季節に同じ場所に行くことで、自然の変化を肌で感じる子どもの様子があり、私自身も、とても新鮮で楽しかった。私たち保育者がいつもよりも身軽に散歩を計画できたのは、少人数のプラス面だったのかもしれない。

今思うとあっという間の六年間だった。またいつか、子どもとの生活を送りたい思いでいっぱいだ。これからの人生でも子どもに携わって生きていけたらいいなと感じている。

（元幼稚園教諭）

保育エッセイ

続 心が育つということ
外に向かう気持ち・内に向かう気持ち

豊田一秀

わが家が子育ての真っ最中であったころのことで、今でもはっきりと心に残る出来事がある。それは小さな出来事であったが、人が育つということに関して、その後の私に大きな示唆を与えた。

長男が三歳半の時、皆で山登りをした。大人なら小一時間で登れる小山だったが、長男はわれわれの励ましに応え、行き帰りすべてを歩き通し、両親も本人も大満足の一日であった。しかし、その夜、長男はひどい夜泣きをして、「さびしい！」を連発したのだった。昼間の山登りでは大きな達成感があったはずなのに、いったい何が寂しかったのだろうか。それとも、ただ、単に身体が疲れたことに起因する不機嫌だったのであろうか。

わき起こった疑問は、子どもは自分の成長を常に喜んでいるのかという問いである。一般に大人や親は、基本的に子どもの成長を期待し、喜ぶ。すなわち、成長を「得るもの」「できるようになること」として、プラスに考えているのではないであろうか。そして、親は、子どももまた自分と同じように自身の成長を喜んでいると考えがちである。しかし、そのように、成

長に対して親子の喜びが常に一致していると単純に考えてしまってもよいのだろうか。

親や教師にとって「喜び」であった子どもの成長は、もしかすると子どもにとっては失うことへの「痛み」として感じられることもあるのではないか、そして、これは、ある意味で人間が避けられず負っている本質的な痛みなのではないか。この疑問は、その後も子育ての中、幼稚園での保育の中と、さまざまな場面で私に迫ってきた。では、人は育つ中で何を失うというのか……。

このことを考える前提として、私には一つの思いがある。それは、人間は、いつでも何かに「包まれている」と感じていないと生きていかれない存在ではないかということである。胎児の時は母親の胞衣（えな）に包まれ、誕生後は母親に包まれ、次には家族に包まれ、社会に包まれ、世界に包まれ、最終的には宇宙に包まれていると感じること、すなわち、包まれているという感覚の対象を、胞衣から宇宙に広げていく過程の中に人間の成長があるのではないかと私は考えるのである。ここでいう「包まれる」とは、抽象的な概念であるが、あえて言うならば、守られている感覚、愛されている感覚、つながっている感覚、コントロールできる感覚、認められている感覚……とでも表現できるだろうか。

胎児は、胎内で十分に育った結果、月が満ちてこの世に生まれてくるのであるが、これを象徴的な「捨て子体験」ととらえることもできよう。新生児はそれまで住んでいた胎内という「楽園」を追われ、この世に捨てられたのである。母の羊水の中で、胞衣に包まれて過ごしていた日々は、人にとって、ある意味、人生で最も満たされた日々であったかもしれない。新生児は誕生によって、それまで自分を包んでくれていたものを失ったのである。これが、私の考える

原初的な喪失による痛みである。

この、人生初期の喪失の痛みを和らげようと努めるのは主に母親である。母親は新生児を抱き、授乳し、新生児を包み、安心できる世界をつくるべく最大限の努力を惜しまない。新生児は、新たに自分を包むモノを得、安住の地を得るのである。乳児の生命力、強い視線、ほほ笑み、自分を通す泣き声……乳児は、ほとんどすべてを母親に依存している存在であるにもかかわらず、実に堂々と立派に生きていると、私はある種の畏敬の念をもって新生児を見ることがある。

しかし、どんなに母親が努力をしたとしても、新生児にとって、胎内に住んでいた時に得ていた母との絶対的な一体感に比べれば、この世は何とも危ういものに感じられるのではないであろうか。なぜならば、新生児は母親から切り離された別個の存在 ―個人― として、呼吸をし、食物を食べ、排泄をし、寒暖に耐え、生きていかなければならないからである。

人間は、自分を包むモノを宇宙にまで広げようとする意思・願望をもつと同時に、それと相反する根源的な願望、母親の胎内に帰還したいという願望をもち合わせている存在のように私は考える。

話を山登りに戻すと、長男の夜泣きは、「包まれている」という安心感が危うくなったというサインであったかもしれないと、今にして私は思う。自分で山登りができたという喜び、自信とは相反する気持ち……自分ができてしまった哀しさ、親との一体感を失う寂しさ、親に包まれているという感覚の危機と言ったらよいであろうか……。

このように見てみると、どのようにして、子どもの、成長に伴う痛みを軽減し、成長の喜びを保障していくのかが、育てるものに負わされている大問題のように思う。自分が「包まれている」という感覚の保持、成長への期待という視点から考えてみたい。

第一に、子どもに安心感を保障することが大切であろう。成長が孤立を意味するものではない、すなわち、できるようになることが、今、包まれているものを失うことではないという安心感を子どもがもてるようにすることが大切であると思う。換言すれば、いつでも戻る場所があるという確かさを保持する援助といえるかもしれない。

第二に、自分の意思で、より大きな世界に出ようとするその機会を尊重することが大切である。自分で飛び立つ時を決めることができ、今の状態から無理に追い出されないこと、成長をせかされないことが大切である。

第三に、より大きな世界に対する不安を減らし、期待をもたせるような働きかけが大切であろう。

第四に、育つということ自体の中に相反して存在する両義性、すなわち「得ることの喜び」と「失うことの痛み」に大人が気付き、共感し、子どもが孤立しないように支えることが大切であろう。

こうして考えると、母親の第一の仕事は、赤ちゃんに「お母さんのお腹の中は良かったが、この世も、そう悪くはない！」と思ってもらえるようにすることであるといえるかもしれない。

特に現代は、子どもの内面の育ちを大切にしながら、ゆっくりと子どもを育てられる大人の賢さが求められているのだと思う。

（玉川大学）

からだ考

食べる
つながる
育つ

『ぶた　にく』から垣間見える農業と命の循環

水流源彦

1　ぶたの命のサイクルは、人間がつくったもの。

「うちの子は、市販のソーセージ、餃子は食べないけど、お宅のは大好きみたいなの」

黒豚ソーセージと黒豚餃子を購入された、ある主婦からのコメントです。鹿児島の知的障害者支援施設ゆうかり学園（成人対象、以下「施設」）では、開設当初（昭和四十二年）から黒豚を飼っています。ソーセージや餃子に入れる野菜も施設産です。餌は施設や近隣の小中学校の残食です。事の始まりが、残ったご飯を捨てるのがもったいない、という昔ながらの発想です。配合飼料は極力使いません。排泄物は、野菜作りの肥料となります。

その黒豚が、『ぶた　にく』という写真絵本（幻冬舎エデュケーション　二〇一〇年）になりました。日本の障害者アートをアールブリュットフロムジャパンとして、ヨーロッパを皮切りに世界へ発信されている、滋賀県社会福祉事業団の北岡賢剛理事長の計らいにより、大西暢夫カメラマンと知的障害のあるメンバー、そして彼らが愛情たっぷり注いで育てている、ゆうかり黒豚とのコラボレーションが実現したのです。

出産シーンから、屠畜場を経て、加工されるまでをたどります。そこには大西カメラマンのファインダーを通して、とても人懐こい黒豚たちの姿が映し出されます。

2　お肉はどこからやってくる?

写真絵本の出版に当たり伝えたかったことは単純で、障害のある人たちの日々の営みが、安心でおいしい黒豚生産につながっていることを知ってほしい、というものでした。

大西カメラマンと編集者との打ち合わせの中で、「子どもも大人も、米や野菜はどうやって育つかを知っている。豚肉がどうやって食卓へ上がるのかを知らせたい」というコンセプトがもち上がったのです。当然、屠畜場へ取材依頼をすることになりました。

屠畜場へ伺った時、所長が一番気にされていたのは、「カメラが入るのは初めて。動物愛護団体からクレームがあれば、従業員をはじめ全国の屠畜場が打撃を受ける、心配だ」ということでした。どこまで見せるべきか、どこまで説明すべきかが課題でしたが、命を頂くということを伝えるに当たり、大西カメラマンはこのシーンにはこだわりを見せていました。

私自身は、同一法人が運営する、ゆうかり保育園の園長を務めています。園児たちは、園庭で野菜を育てたり、農家のご協力による田植え体験をしたり、施設（保育園から車で四十分ほどかかります）の畑で芋を植え、掘り、ブルーベリーやミカンを収穫し、黒豚、黒牛と触れ合います。極め付けは、施設から週一回届く、保育園の保護者向けの取れたて野菜の直売です。これらは食育の観点から見れば、環境的には整っているほうであると思われます。しかしながら、環境を整えること、体験させること、にとどまっていたかもしれません。

二〇一一年十二月、鹿児島市内で『ぶた　にく』写真展を開催しました。開催に当たり、山口県下関市の「こどもの広場」（児童書専門店）代表の横山真佐子氏に、「食育」に関する読み聞かせを依頼しました。

ゆうかり保育園の子どもたちは、読み聞かせ当日、写真展を見学する前に、施設を訪ね、写真になる前の黒豚たちと対面してきていました。横山氏に「どうだった？」と聞かれた彼らは、「くさかったー」「大きかったー」「かわいかったー」と、それぞれに自由な感想を並べます。しかし、「くさかった」という意見が大勢を占める様相を呈した時、横山氏から「くさいって、どういうこと？」という問いかけが……。しばしの沈黙。横山氏「じゃ、自分の履いてる靴下脱いで、かいでごらん？」「お隣のお友達の足をにおってごらん？」子どもたちは、それはそれは、大盛り上がり。「くせーっ」「私は、くさくないもん」等々、ひとしきり盛り上がったところで横山氏から一言。「くさいって言われること、どう感じる？」

施設を訪れる多くの見学者は、「きれいですね、思ったほどにおいませんね」と言われます。比較的、正直な感想であると思います（日々、清掃作業をしてくれている、障害者の努力のたまものなのです）。しかし、子どもたちにとっては、少しでもくさいものは、くさいわけです。この黒豚たちを、よもや自分たちが食べていたり、これからも食べ続けるということとは直接的にはつながらないのが現実です。しかし、「くさい」と言われた当事者の存在を感じてほしいのです。ここでは、黒豚ではなく、生産者としての障害者の皆さんのことを。言われる側のことを慮る、さらには、感謝し、敬服する。他人事を、自分事とし、感じることができる。これらの感覚をじわじわと伝えていきたいと、しみじみ思っています。

3　ぶたは、かわいい。けれどやっぱりおいしい生き物。

写真展開催に合わせて、食文化の改善のため、「食育」の必要性を訴え続けてきた服部栄養専門学校校長・医学博士の服部幸應氏をお招きし、氏にプロデュースしてもらったゆうかり黒豚料理を食べてもらう「ゆうかり黒豚ランチビュッフェ&トーク」を開催しました。服部氏をご紹介いただいた朝日エル会長の岡山慶子氏、大西カメラマン、当法人理事長による黒豚トークも繰り広げられました。その中で、服部氏は「旬」について語られました。「旬」を知るには旧暦をたどるとよいそうです。ハウス栽培や輸入によって「旬」の感覚を失ってしまうことに危機感を抱くべきだと。「地産地消」に重ねて「旬」を肌で感じる「ゼロ・キロメートル」の循環型農業を展開することが大切です、と。

私は、『ぶた　にく』を通して、昔ながらの一農家としての施設の営みを感じてもらいつつ、そこで働くメンバー（知的障害の方々）に想いをはせてもらいたいのです。そこには、当時は日本の農家では当たり前であった風景、循環する農業が凝縮されています。

人が人に想いを寄せることが循環することも、すてきなことだと思います。

『ぶた　にく』のあとがきに、当法人の理事長が一言。

「みなさんが、おいしい、と残さず食べてくれることが、豚たちへのいちばんの供養だと思っています。それはまた、どんな食べ物でも同じことだと思います」　（社会福祉法人ゆうかり副理事長／ゆうかり保育園園長）

▲『ぶた　にく』表紙
（幻冬舎エデュケーション　2010年）

子ども学探訪

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック

昭和初期の幼稚園を映すテキスト

浜口順子

「お家と幼稚園（オウチ　ト　エウチヱン）の巻」（昭和四年四月発行）

倉橋惣三が編輯顧問になって二年目、『キンダーブック』第二輯第一編では、子どもの日常生活の舞台そのもの（家庭と幼稚園）が主題に取り上げられた。その前の第一輯では、「米」「乗物」「桜」「養蚕」「皇室」「犬」「お正月行事」「雪と氷」「お人形」「電気」というテーマが並んでいたが、ここへ来て、最も子どもの生活に密着したものが登場した感がある。全ページを通じて普段の子どもの姿が描かれているのは初めてだ。

一方、この号から、表紙右上に「賜台覧」と「文部大臣推薦」の文字が見える。大正十五年の幼稚園令公布により、幼稚園は小学校から独立した教育機関として公認されたといえる。その教育を促進するためのテキストとして登場した絵雑誌がキンダーブック、と一般的には評価されている。発刊後一年余りにして、幼稚園直販方式という独特の販売スタイルが軌道に乗り、現場保育者や家庭への販路を確実に広げる一方で、台覧、すなわち皇族関係の方に

も読まれるようになり、さらに国（文部省）からのお墨付きも得た。昭和ひとケタ時代は、教育現場が厳しい軍国主義的統制を受ける前ではあったが、このような位置付けを得ることが、当時の日本においては、この絵雑誌、および幼児期教育が、社会的認知を享受したことと同義となるのだろう。

▲画像1

表紙には遠足の風景（**画像1**）。巻末に別紙で付いている解説部分には、「桜花爛漫たる春の丘に、幼稚園の先生を中心とする幼き園児たちの可愛らしいピクニックの有様を描いたもの」とある。中央の、帽子をかぶった男児と女児は、植物図鑑だろうか、（当時の）キンダーブックのような横広で薄い冊子を手にしている。よく見れば、足元に咲く野の花を観察している風情。キンダーブックが、幼稚園令で新しく保育項目に加わった「観察」を促す教材として制作されたことを考えると、当然の構図かもしれない。しかし背景には、ラッパを吹く子どもの姿や、新鮮な空気に向かって腕を伸ばす女児、ふざけじゃれ合う男児たちの姿も見えるので、子どもが好きなことをしてもいい、自由な雰囲気は伝わってくる。

当時の幼稚園生活

この「お家と幼稚園の巻」は全部（表紙含）で18ページあり、初めの9ページに幼稚園、次の6ページに家庭で子どもが過ごす様子、「附録」（戦国時代の子ども＝楠木正行が、父・

正成の死後、村で遊ぶ姿）1ページ、最終ページは「オモチャ」一覧、という内容である。幼稚園で遊んでから家に帰って過ごすまでの「子どもの一日」を追いながら読むという構成になっている（この号の五年後の第七輯第三編で再び「幼稚園」がテーマとなるが、そこでは行事を追って一年間の流れが描かれている）。大半の絵が、都会の裕福な家庭の子弟をモデルに描かれているが、「デンエン」の農村の子どもの様子も2ページある。

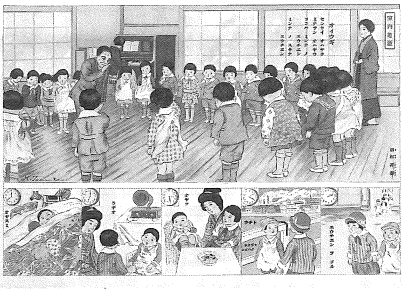
今回は、幼稚園の様子が描かれているページを順に紹介してみたい。

▲画像2

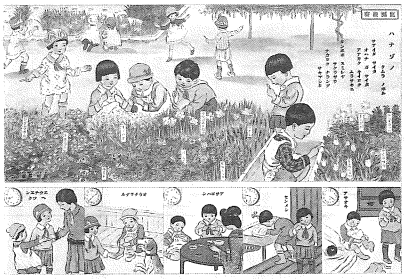
まず、雨の日の登園風景から（**画像2**）。下駄箱、すのこなどは今と変わらないが、肩から掛ける幼稚園バッグの代わりにランドセルを背負っている女の子、手ぶらの子どもも見える。傘と長靴は黒色、持っているだけ特別なのかもしれない。

次は「授業」のページ（**画像3**）。現代の一斉か設定遊びであろう。折り紙（授業一）と積み木（授業二）で遊ぶ光景。解説では、折り紙も積み木もフレーベル恩物の一部に属するものとの説明がある。しかし、絵の中の子どもたちはツルなどを作っているので、恩物の幾何学的折り紙ではない。次の文が、日本の伝統的折り紙の伝承であることを明らかにする。「オフネガデキタ　ツルガデキタ　フクスケガデキタ　キモノガデキタ　ボクハ　オソハッテ　ナマヅガデキタ」。

▲画像3



▲画像5



▲画像4

積み木は、解説にもあるように、「ヒル氏積み木」である。日本で初めてこれを幼稚園に取り入れた東洋幼稚園の岸邊福雄が、倉橋と共にキンダーブックの編輯顧問であることを考えると、遊具環境の紹介、啓発への意思を感じる。

次は、見開きで「庭園観察」と「室内遊戯」の図だ（**画像4、5**）。下部に、一日の流れが時計と共に描かれている。当時の幼児の模範的な一日が示唆されている。「6時20分 朝起き、6時50分 洗面、7時20分 朝ごはん、8時10分 お家を出る、8時45分 幼稚園へ着く、2時10分 幼稚園を出る、2時20分 途中、道草を喰わずに（道草を食う図）、3時30分 おやつ（まげ結いの母親の図）、7時 ラジオ、8時 おやすみ」。夕飯や入浴が入っていないのは不可解であるが、夜8時就寝というのは現代と大差がない。

その次は「競技」とあり、玉入れの図だ（**画像6**）。赤のかごと、白のかごで競うのは同じだが、「バスケットボール」という名で呼ばれていたようだ。

次は「模倣遊戯」とある。「ヤオヤ」という看板のある小屋の周りに、売る人、

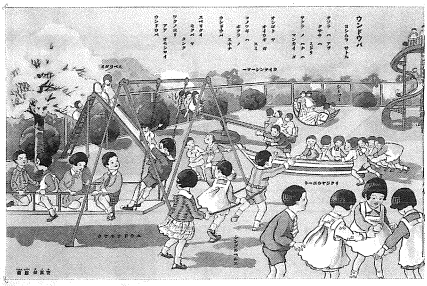
▲画像6

▲画像7

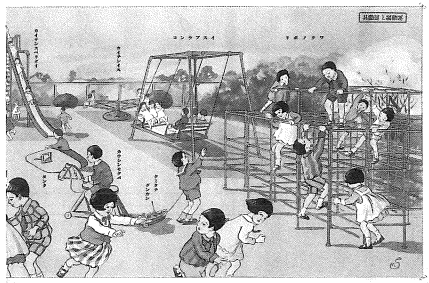
買う人の人だかりが出来ている（**画像7**）。子どもが入れるほどの大きい家が設えられた、スケールの大きいごっこ遊びは、大正末から東京女子高等師範学校（女高師）附属幼稚園で始まっていた誘導保育をモデルにしていると考えられる。このころの同幼稚園は、関東大震災で園舎が全壊した後、まだバラックの園舎で保育していた。その中で、保育者たちが、絶対的な物資不足の中、廃材などのあらゆる材料を生かして、まさに創造的に、子どもたちのアイデアを生かした教育環境を手ずから作り出し、創意工夫を重ねて継続的発展的なごっこ遊びを繰り広げていたのが誘導保育の始まりであった。[注] 誘導保育は、昭和七、八年以降、『系統的保育案の実際』に結実し、倉橋惣三による理論化を背景に、戦後にかけて日本の代表的な保育案になっていく。

戸外大型遊具のカタログ

その後に来るのは、「運動場と運動具」という見開きページだ（**画像8、9**）。実際にこれほど所狭しと大型遊具が置かれていれば、子どもの遊ぶスペースがなくなってしまうだろう。とはいえ、大型遊具の合間で、じゃんけんぽん、鬼ごっこ、ロープの輪を使う電車ごっこ（「シングルベルス」とある）、模型の船（クミタテグンカン）を引っ張る子どもの姿もある。大型遊具の中には、現代にあまり見られないもの、呼称の違うものなどがあって面白いので紹介しておこう。



▲画像９



▲画像８

画像８の右から、「ワクノボリ（現代のジャングルジム）」、「イスブランコ（片側に三人ずつ乗れる大きなもの）」、「カイテンイス（小さいメリーゴーラウンド式）」、「カウシンモクバ（車輪付き木馬）」、「タンク（一人乗り戦車）」、「カイテンスベリダイ（かなり高度があり危なげに見える）」、「シーソー（今のシーソーとは違い、半弧型乗り物の両端に二人ずつ向かい合って座り、ゆらゆら揺らす）」、「リクジヤウボート（押してもらうと進む陸上の船）」、「カイテンシーソー（支点を中心に回るシーソー）」、「スベリダイ」、「ユウドウキヤウ（双方の脚台から吊るした水平の台の上に乗り遊動させる）」。

このページが、フレーベル館の社業である大型遊具製造販売の促進をも意図した構成であったことは間違いない。『フレーベル館一〇〇年史』によると、大正十四年七月に同社は、鉄製運動具の発売を開始しており、昭和二年十月に「ワクノボリ」が発売された。これは当時の女高師附属幼稚園主事（園長）堀七蔵が考案して同社に製作させたものだったという。

―続く―

（お茶の水女子大学大学院）

注　津守真・及川ふみ他「誘導保育の成立のころ（昭和初期）―座談会―」『幼児の教育』第六十五巻第八号　一九六六年　pp.24-34

特別寄稿

「この霧が晴れるまで」他4篇

～母親が詩に綴った「福島発、子どもたちの現在」～

大澤秋恵

お茶の水女子大学ECCELL[注1]では、二〇一二年二月十一日に第四回子ども学シンポジウムを開催しました。東日本大震災から十一か月を経たその日に、福島市の保育士さん、保護者の方（三人の男の子のお父さん）、研究者の大宮勇雄先生においでいただき、お話を伺いました。[注2]

三人の方々とのその後のやりとりの中で、シンポジウムでお話しくださった保護者のお連れ合いの大澤秋恵さんが、原発事故後、「表現せずにはおれない」思いで書かれた詩を、送ってくださいました。皆で受け止め、共有したいと思い、ここに掲載させていただくことにしました。（お茶の水女子大学ECCELL　菊地知子）

この霧が晴れるまで

見えない物が降ってきた
子らに笑顔でおやすみを言ってから
一人茶の間にうなだれる
ほんの一瞬の気のゆるみ
涙がふいにこみあげる
何という緊張の連続なのか
平常な自分を保とうと
みんな必死で生きている

手と手をつないで歩いて行こう

あの道も　この道も
ずっと歩いてきた道だから

どちらへ行けばこの霧が晴れるのか
まだ誰にも分からない
だから今は決してその手を離さないで
真っ黒い大きな雲の渦に
　　のみ込まれてしまいそうだから

手と手をつないで歩いて行こう
あの山も　この川も
また　きらきら輝く時がやってくる

ほんの少し気をつけることが増えただけさ
〝これは食べたらいけないよ〟って
教えてあげればいいのだから
あっちでも　こっちでも
誰もが測れるようにしてもらえば簡単さ

さあ　だから今は立ち止まらないよ

鉛のようなこの見えない霧に
　　押しつぶされてしまわぬように
つないだその手を離さないで

声に出して

喜びも哀しみも
楽しいことだってたくさんある
何も感じなかったら生きていたってつまらない
ならば「怒り」も忘れちゃダメさ

家族と離れて暮らす人
仲間の元を去りゆく人
不安を胸に働く人
なぜ　こんなにもめちゃくちゃになったのか

元気いっぱいの子どもらが
　　野っぱらを駆け回ることもできず
もっと小さな子らはどろんこいじりさえ許されない

ただ健やかでありたいという願いが
日々の食卓を悩ませる

一体全体　どういうことなの!?!
みんな本当に怒っている
どうすればいい？
ちっぽけな自分だけれど

心の声に
耳をすまして
そっと表に出してみる
どうすればいい？
この小さな叫び

あっちからも　こっちからも
みなの叫び声
みんな集まれ

〝未来を取り戻したい〟

のっぺらぼうのオバケ

桜の花も　見慣れた景色も
みんな灰色でモノトーン

一瞬、後ろを何かがよぎる
ここはどこだろう
或いは夢を見ているのか
どこか違っている
まるで光を失った　のっぺらぼうのオバケ

子らよ
君らの瞳には　どんな風に映っているのだろう
田んぼのあぜ道　ぶどうの畑
花をつんだり　虫を追いかけていた

その世界を
来る日も、来る日も、窓の内から
君らはいったい
どんな瞳で　見つめているのだろう

嗚呼　どうか届いていて欲しい
太陽の眩しさも　風のきらめきも
以前と何も変わらず
君らにだけは
この世界の　あざやかな色そのままに

のっぺらぼうのオバケなんて
母さん　もう　さよならしようかな
手をつないで　歌をうたって
そうして　また
たんぽぽをいっぱい見つけたら
一緒に　ふぅーって吹こう

ぼくらの五つ星

ダンプに　クレーン　ミキサー車
窓の向こうは大にぎわい
ぐるり囲んだ　その塀に
ぼくらの五つ星　光ってる

「原」「発」「N」「O」「！」

薄紅のぶどう畑を横切って
家路を急ぐ車から
向こうにそれが見えた時
幼い君が叫び出す

「原」「発」「N」「O」「！」
げん・ぱつ・えぬ・おー・のー！（NO！）
げん・ぱつ・えぬ・おー・のー！（NO！）

「原」「発」「N」「O」「！」
げん・ぱつ・えぬ・おー・のー！（NO！）
げん・ぱつ・えぬ・おー・のー！（NO！）
声をはずませ
力の限り
いつまでも

君が　そう叫ぶ

花のサイン

たんぽぽを見つけては
　手のひらいっぱいに摘んでいたあなた
野花を持ち帰っては
　お家のコップに飾っていたあなた
大好きなあなたへ

もう花なんか踏んじゃうから

春の気配を感じたあの日の夜
吐き捨てるようにあなたは言った

背中を壁にぴったりとくっつけ
唇をかみ　じっと斜めに床を見つめている
あなたがどんなに嫌がってどんなにもがいても
あなたをただ強く抱きしめた

とったらダメって言うんでしょ！

ふりしぼるように小さな声で
あなたが今にも壊れちゃいそうだってこと
教えてくれて良かった

（福島市・保護者）

注

1　EarlyChildhood Care/Education & Lifelong Learning「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築事業」の略称で、平成22年度より6か年計画で推進される特別経費による教育研究プロジェクトです。乳幼児、学生、社会人が共に学び自らの成長を探求する場の創造を目指しています。

2　子ども学シンポジウムでのお話をもとに再構成された鈴木直子さん、大澤由記さんの文が、『忘れない！明日へ共に　東日本大震災・原発事故と保育』（ひとなる書房）に収められています。併せお読みいただければ幸いです。

論考

保育者の誕生

―東京女子師範学校初代主任保姆 松野クララ来日の経緯について―

立浪澄子

二〇一一年十一月三日、東京青山霊園で松野クララ顕彰碑の除幕式が行われました。この碑には、すでに本誌春号で紹介されたように、洋装金髪の女性を中心にして洋装や和装の幼児（その中には、当時としては大変少なかった外国人幼児も何人か交じっています）、そして和装結髪の日本女性も二人加わって遊戯をしている陶版画が碑文と共にはめ込まれています。碑文には

「松野磵の妻クララ（一八五三～一九三一）
ドイツ、ベルリンに生まれる。
日本人男性とドイツ人女性の正式な国際結婚第一号。
明治九年、日本で最初の官立幼稚園（東京女子師範学校附属幼稚園）の主任保母としてフレーベルの幼児教育法を導入し、指導にあたる。
また、ピアノ奏法の指導に先駆的役割を果たした。
日本の近代化に尽くした功績を讃え、顕彰碑を建立し、次代に伝える。
平成二十三年十一月」

▲松野クララ顕彰碑

と刻まれています。ここに記されているように、絵の中の洋装金髪の女性、松野クララは旧姓をクララ・ルイーズ・ツィーテルマン（Clara Louise Zitelmann）といい、碑文にあるとおり、日本にフレーベル主義保育法の実際を紹介した最初の人です。倉橋惣三はその著書の中で、松野クララは「わが國幼稚園の恩人ともいふべき人」[注1]であると述べています。

しかし、筆者がいつも不思議に思ってきたのは、日本に初めて幼稚園が設立された時、結婚のために来日したばかりのクララが幸いにも保育者の資格をもっていたので保姆となったという説明です。例えば、『日本幼稚園史』では、クララは「獨逸人で、その頃農商務省の役人であった松野磵（はざま）氏の夫人であった。幼稚園のことについて詳しく、殊にその保育法の理論及実際は、フレーベルからの直傳であるといふので、女子師範學校が幼稚園を創めるに當つて、請うて主任保姆に迎えたのである」[注2]と紹介しています。『日本の幼稚園』でも、「偶然にも、こういう人が近くにいたということは、お茶の水幼稚園にとってだけでなく、幼稚園創生期の日本にとって、どれほどしあわせなことであったかわかりません」[注3]と述べています。

クララの保育法が「フレーベル直伝」であり、保姆就任前にすでに磵と結婚していたかのような記述は倉橋の誤解ですが、クララの就任が「偶然」であるということには、これまでもあまり疑問をもたれていないようです。

しかし、クララが来日したのは一八七六（明治九）年八月十四日、田中不二麿が幼稚園開設の伺いを出したのは前年一八七五（明治八）年七月七日、クララ来日の一年以上も前でした。しかも、その設立伺いは、一度目は却下されたので、八月二十五日に二度目の伺いが出されました。その中で、田中は「幼稚園ノ儀ハ児輩ノ為メ良教師ヲシテ専ラ扶育誘導セシメ遊戯中不

知々々就学ノ楷梯ニ就カシムルモノニシテ」[注4]と述べています。彼はすでにこの時、教師こそ教育の要であるという認識をもっていたのです。幼稚園の「良教師」として田中はいったいどんな人物を頭に描いていたのでしょうか。

明治八年当時、日本に幼稚園保育法の実際を知る人がいたとは考えられません。クララはまだドイツを出国すらしていませんでした。しかし、全くの新規事業であった幼稚園の直接の担い手について田中が何の目途もなく伺いを出すとも考えられません。当時、田中には幼稚園指導者としてすでに十分意中の人物がいたと考えるのが自然ではないでしょうか。

ここで思い当たるのが、岩倉使節団がベルリン滞在中（一八七三（明治六）年三月九日～三月二十八日）に、磯がベルリンで木戸孝允や大久保利通と出会っていることです。[注5]

田中はこの岩倉使節団に随行していたのですが、このころは別行動を取っており、一八七二（明治五）年八月五日（新暦）、使節団より先にベルリンに到着、ヨーロッパ各地を見聞し、一八七三（明治六）年一月三日ベルリンを出発、三月二十四日帰国しています。彼はこの間何度もベルリンと各地を往復し、幼稚園を見学したり、幼稚園に関する文献の翻訳を当時田中の通訳兼秘書として同行していた新島襄に命じたりしています。[注6]また、その間にロンドンにいた木戸を訪ねたりもしています。この時期、田中がベルリンで磯と出会い、外遊中芽生えた彼の幼稚園開設のプランを磯や木戸に語っていたとしたら？

小林富士雄氏の調査によれば、磯は一八七四（明治七）年二月二日、クララと姉マリーの立ち会いのもとセント・ヤコブ教会（St.Jacobi.C）で洗礼を受けたということですから、[注7]もし二人

がすでに一八七二（明治五）年ごろから知り合っていたとしたら、もしかしたら、クララも磯のそばにいて田中と出会っているかもしれません。

なぜなら、田中は幼稚園開設が認められた後、翌一八七六（明治九）年四月から一八七七（明治十）年一月までフィラデルフィア万国博覧会に出席するため渡米、幼稚園開業時にも不在だったのです。にもかかわらず、彼は後年、「予は積極論者として（中略）遂に其開設を断行し、而して彼の幼稚園の誕生国たる独逸人にして、当時既に松野磯氏夫人となりしクララ子を主任教師に任ぜり」[注8]（傍点筆者）と述べています。ここで田中が「既に」と述べているところからも、彼は磯とクララの婚約を早くから知っていて、当初からクララが来日した暁には指導者として迎える手はずを整えた上で幼稚園開設の伺いを出したと考えることはできないでしょうか。

クララもまたすでに来日後は幼稚園教育を伝授する役割を自覚していた節があります。

カテリーナ・ツィーテルマン（Katharina Zitelmann 一八四四～一九二六）は世界中を旅したドイツの女流作家ですが、その著『Als die Welt noch offen war』に、彼女が一九〇四（明治三七）年から一九〇五（明治三八）年ごろ東京のクララの家にほぼ六週間滞在したという記録があります。その中で彼女は、クララは磯と婚約した後、磯の希望どおりに幼稚園教師としての卒業試験を受けた、と述べています。[注9]

カテリーナ・ツィーテルマンが述べていることが事実だとしたら、磯は田中（または木戸）から日本における幼稚園開設の計画を聞き、それでクララに幼稚園教師の資格を取るよう勧めたのではないでしょうか。そして、木戸もまたそのことをよく承知していて、それがクララを

わざわざ横浜まで出迎えに出たり、宿所の便宜を図ったり、英語教師として招くなど、クララに対する並々ならぬ計らいにつながっていったとは考えられないでしょうか。そうでなければ、一八七五（明治八）年八月二日に帰朝した磯はどのようにして日本に幼稚園開設の機運があることを知ったのか、甚だ疑問が残ります。

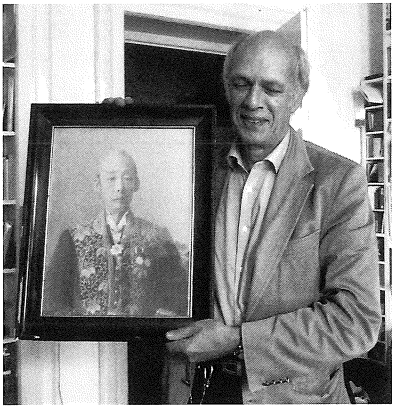
しかし、磯が在独時からすでにその情報を得ていたと考えれば、クララが、磯帰国後一年近くたってからようやく、ドイツを出国している事実にもうなずけるものがあります。さらに、八月来日後、磯の病気や結婚の延期などトラブル続きの中にあって、クララは早くも十一月には豊田芙雄らに恩物の作成方法やフレーベル保育法の講義を開始し、幼稚園をスタートさせていますが、結婚のため来日したクララにとって主任保姆就任がまったく予期せぬ事態だったとすれば、これはかなり不自然ではないでしょうか。しかし、出国時クララにはすでにその用意があったと考えれば、このような事態も彼女はそれなりに冷静に受け止めたとも考えられます。またその後、磯がクララの講義の通訳を買って出たり、豊田芙雄への手紙を翻訳したり、クララが妊娠中でありながら群馬まで講演旅行に出ることもいとわないなど、クララの仕事に極めて協力的だった事実も理解しやすくなります。

筆者は二〇一〇年八月、ミュンヘンを訪れ、クララと磯のひ孫ニコラウス・フォン・ハインツさんにお会いしましたが、その時ハインツさんは長松幹（一八三四～一九〇三）の肖像写真を見せてくださいました。おそらく、クララがドイツ帰国の際、大切に持ち帰った遺品の一つに違いありません。磯の姉、長松夫人は長い間クララとは近所に住み、夫の死後はクララと同

居していたということですから、長松一家はクララにとっても特別の存在だったのでしょう。

二度の大戦を経て、今なおドイツで子孫の手にあるその写真は、百余年の時を越えて、まるでクララがそこにいるかのような感慨を筆者に与えてくれました。

（長野県短期大学）



▲長松幹の写真を手にする
Nikolaus von Heinz氏
（2010年8月15日筆者撮影）

参考文献

1 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』フレーベル館 一九五六年 p.345

2 1に同じ。p.344

3 上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』理論社 一九六五年 p.16

4 『太政類典第二編明治四年～明治十年 第二四五巻 第四類 学制三 学校 七五』国立公文書館

5 成川房幸「故松野磵先生の譚」『明治林業逸史』大日本山林会編 続 一九三一年 p.438 他

6 小林哲也「『理事功程』研究ノート」京都大学教育学部紀要（二十）一九七四年 pp.89-90 出典 新島襄全集八 年譜編（京都同朋舎出版 一九九二年 p.109）

7 小林富士雄『明治のロマン 松野磵と松野クララ』大空社 二〇一〇年 p.108

8 田中不二麿「教育瑣談」大隈重信撰副島八十六編輯兼発行『開国五十年史』上巻 p.734

9 Katharina Zitelmann『Als die Welt noch offen war』一九一六年 pp.156-157

訳については、坂牧悦子氏の助力を得た。

1 7 28
幼児の教育
110年の散策
56 109 110

戦後の復興関連の記事から
―第四十五巻第三号（一九四六年十二月）より―

本シリーズでは、戦前の関東大震災や、約二十年前に発生した阪神淡路大震災など地震関連の記事が続いた。今、東日本大震災からの復興策と、これから本格化するであろう保育制度の改革を重ねて概観してみると、復興の中心にあるはずの被災者や、保育の中心にあるはずの子どもといった、まさに当事者側の視点がどこまで生かされている政策なのか、不明瞭なままである。さて今回のアーカイブズは、大戦終結期に約二年間の休刊を経て復刊した本誌の第四十五巻第三号の記事から、戦後復興期の保育所の意気込みを見ていきたいと思う。

当時の編集主幹であった倉橋惣三による「復刊のことば（第四十五巻第一号）」には、「過去には追憶と舊足跡がある。今日には反省と新意気があり、将来には希望と新発展がある。（中略）わけても、過去を知らず、今日に新たに生き、将来に新たに展び開く幼児達と共にあるものとして、本誌の復刊が、真に新らしき再生でなければならぬことこそは、自ら警めて怠りなきを期している。」とある。この保育界の復興が、将来に新たにのび開けていく子どもたちと共にあらんとする保育士の決意の中で進行したことを、今ここで、しっかりとかみしめておきたい。

佐治由美子（聖学院大学）

再建の保育界　東京都保育所の復興（一九四六（昭和二十一）年第四十五巻第三号）

秋田美子（東京都民生局保護課）

私達東京都の保育班は、殆ど総ての人から全く不可能だと評価されて居た幼児の集団疎開を決行して、長野、埼玉、群馬の各県に直営五ヶ所、委託二ヶ所の疎開保育班を設置し、帝都に残された幼児二百数十名を送った。可成りの悪條件の下で、関係者一同全く決死の覚悟でこれに当ったが、見知らぬ土地に女ばかりのこととてその労苦は言語に絶するものがあった。しかし良く全員之を克服して無事難事業を終了した。可愛いい子供達を待ちに待った保護者の膝下に返したのは昨年の暮近くだった。

此の頃廃墟と化した街の中には、遊ぶ術さえ忘れて了って無暗にジープの後を追い、進駐軍に媚びる様な態度の子供の姿が非常に多くなって来た。この悲しい状態はどんなにか私達の胸を痛めたことであろう。一日も早く保育園を再開して、この子供達に健全な遊びを与えてやりたいと云う希いは期せずして起って来たが、時期まだ早しとの上層部の意見もあって、兎に角都内の子供の動態を調査し、施設に対する要望の一端を知る為にもと計画されたのが、焼跡の野外保育班の編成であった。神田、杉並を皮切りに、疎開保育の疲れを癒す間もなく、京橋、王子、芝、牛込の各区に十一ヶ所の青空保育を試みた。社寺の境内、公園或は又焼跡の真只中に而も時期は寒さに向う十月末から十二月の上旬にかけてであって非常に不適当な折であったにも拘らず、飢えかわく者が水を求める如くに集って来た。多い處では日々の出席二〇〇名を下らず、延八〇〇〇名の子供が之に参加すると云う盛況だった。此の状態は又保姆達をいたく感激させ、寒風に身を曝し殆んど何等の保育用具もない中で、敢然自身の持つ能力、技術のみを唯

一の武器として頑張りつづけさせたのであった。「先生働いている私達の為に是非之を続けて下さい」「こんなに喜んでいる子供の為に何とかしてこの事業を止めないで下さい」と母親達は切実な願いを訴えるのだった。又幼い子供の口からさえ「早く御屋根のある保育所に行きたいなあ」と洩らされるのを聞いては、私達もヂッとしては居られなかった。

此の頃漸く機も熟しかけて居たので、この野外保育の結果を好資料として、色々の準備を経た後、都立保育園として最初の産声を挙げたのは今年三月十二日である。現在の勝関保育園がそれで、開園数日にして百五十名を入園させねばならぬ有様。所属の園長以下暫くは夜の目も眠らず、準備に忙殺され乍ら子供達の期待に答えたのである。

○

無我夢中に働らいた野外保育終了後、新たに常設のものを作る準備の期間中、漸く息をぬいた途端、自分達の持つ保育理念や保育方法の検討の必要を切実に感じ出した。頭の切り替えをし、新らしい観点に立ち直らねば、安心して子供の前に立つことは出来ないと、焦り気味になって来ていた。そこで都では早速之に応じて可成り大掛りな再教育講習を催し、倉橋先生以下十数名の講師を迎えて約一ヶ月に亘る期間を之に費した。民主主義とは何か、国際的な立場から今は如何に保育すべきか等、その他広範囲にわたる勉強を受けて大いに得る處があった。

勝関をスタートに、次々に都内区部に十三ヶ所、三多摩に十二ヶ所（之は戦時中から継続されたもの）の保育園を設置し、新たな角度から保育なるものを建設して行こう、即ち在来のものを色々批判し、幼稚園と託児所の長所のみを採り上げ、その上に新らしい文化国家の建設と世界平和に貢献すべき使命を擔う幼児に人間としての基礎をしっかり築かねばならないのだと、大いに意気込んだのだった。併し現実の姿として、私達は自分の力の足らなさ、技術の未熟さ

を一々思い知らされたのである。殊に年齢層の若い保姆達は、戦時中に総ての教育を受けた悲しさに、談話にしても歌にしても使えないものが多く、さりとてどうして好いか解らぬと云う場合も少くなかった。その当時は未だ国民学校以上の教育指針や方向も確定されず、何處に根拠を置いてよいのやら、折角の講習は受けたが一つ〳〵実際の場面に突き当るとまだ〳〵解らぬことが多くて困った。そこで私達は在来の人から与えられるのを待つのみの態度を捨て、自分達の手で自主的に勉強し研究し創っていく会を作ろうではないかと云う事になり、係の方も色々助力された結果、東京都保育研究会なるものを組織したのは今年の五月半ばであった。

会員百二三十名余りしかないが、数種の研究部会を編成し、部会の活動を中心に日常の保育を部会研究の綜合的な結合に依って動かして行こうとする仕組みで、日々の保育の問題は即部会の研究課題になるわけで、研究と平常保育とが不即不離の関係に成り立って居る。（中略）

體にも心にも殆んど一寸のすきもない様な気持ちで、実際皆可なり疲労しているに違いないが、建設の喜びと仕事に対する誇りとがそれをカバーして、明日への努力をさせてくれるのだった。併しこの研究会もまだ総ては将来にかかるのであって、その研究活動の結果が云々されるのは今後のことであるが、どうか会員一人々々の責任ある勉強によって、今後の保育事業の上に何等かの足跡を残す様なものになってくれることを切に願う次第である。

こうして、係員も保育園職員も全く心を一つにして働らいて来た結果はその事業の上に反映して、開設六ヶ月にして在籍園児数二三〇〇名を数えるに至り、彼方でも此方でも受付は断り切れぬ程となった。入園を許された母親の感謝の気持ちは色々の形をとって園への協力となって表われて来ている。それにも増して嬉しいことは、子供達が日曜や祭日をつまらないと云い毎日々々の登園を心から楽しみ喜んでくれることである。（後略）

子ども学のひろば

絵本の紹介　『どうだ！まいったか』 田島征三　大日本図書　2012年

カマーくんとオヤツちゃんは、前作『かまきりのカマーくんといなごのオヤツちゃん』でいろいろな危機を乗り越えて、ユーモラスな友情を育みつつも、別れ別れになってしまっていましたが、この続刊では、川に流されながらも愛しいオヤツちゃんとの再会を夢見て旅を続けるカマーくんにナマズやカラス、ネコが立ちはだかり、さらなる試練が降り注ぎます。

そのたびに、カマーくんは勇敢に立ち向かい、脅威を払いのけ、前へ前へ進んでいきます。しかし、その陰には、見えないところでオヤツちゃんの助けがあったのです。

田島征三さんのあたたかく力強い筆先で描かれた、けなげなカマーくんたちの姿に、「生かされている」自分の存在にも気付かされる絵本です。（N）

本の紹介　『忘れない！　明日へ共に 東日本大震災・原発事故と保育』 『現代と保育』編集部編 ひとなる書房 2012年

「そこに暮らしがある限り、子どもたちの笑い声を響かせるべく続けられる保育の営み。今全国の保育者へ向けて万感の思いを込めてつむぐ被災地の言葉。」（帯より）

岩手・福島・宮城3県の保育者、保護者の文章が、どれも胸にズシリと来る。悲しみ悔しさ怒り……いろいろの涙が出る。まとめ部分を書かれた大宮勇雄先生を含め、2012年2月にECCELL子ども学シンポジウム登壇のためお茶大に来てくれた福島の方たちの声が、もう一度聞こえてくる。（K）

紀要の紹介 「環境に対する豊かな感受性を育む」 お茶の水女子大学附属幼稚園

環境と幼児とのかかわりについての4年間の研究成果を3冊の紀要にまとめました。

平成20年度は小さな生き物や植物とのかかわりを通して、平成21年度は光や風、雰囲気など目に見えないものに焦点を当て、平成22～23年度は、園舎内の環境に視点を移し、「場」について考察しました。

紀要は実費でお分けできます。興味のある方は、お茶の水女子大学附属幼稚園（03-5978-5881）までご連絡ください。（M）

DVDの紹介　「隣る人」 監督　刀川和也　2011年 製作・配給　アジアプレスインターナショナル

親と暮らすことができず児童養護施設で育つ子どもたちと、“隣る人”＝保育士の8年間を映したドキュメンタリー。

親が居ようが居まいが、子どもはこうしてすっぽりと腕の中に抱かれたり、あるいは背中でたっぷりと全体重・全存在を受け止められることが必要なのだ。そして、映画中にあるように「どんなむっちゃんも大好きだよ」と言ってもらって、人の愛の形を全身で知るのだろう。（K）

エピローグ

特集「問い直そう、保育の中のあたりまえのこと」も今回で7回目になりました。今回のテーマは「共感」です。どのような時に私はこの言葉を使っているのだろうと日常を振り返ることから問い直しを始めました。そうやって考えていたら、こうだと思っていたことがそうでもないように思えてきて、だんだんわからなくなってきました。そんな思いを佐伯先生にぶつけてみたら、「いいねえ」という返事が返ってきて面白い話がたくさん聞けました。

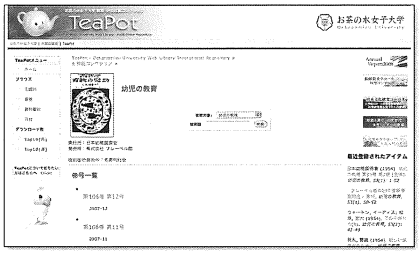
夢中になって佐伯先生の話を聞きながら思ったことがあります。「問い直すこと」、それは正しい答えを早く見つけるための行為ではなくて、わからないという状態とゆっくり付き合う行為なのかもしれないということです。

皆さんはどう思いますか？（M）

幼児の教育 バックナンバーをWEBページで公開中

「幼児の教育」または「TeaPot」で

検索



http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/

明治34年発行の創刊号から、現在、平成20年発行の第107巻までご覧になれます。
なお、自由投稿、「ひろば」への情報などもお待ちしております。
nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp まで。

次号予告　幼児の教育 冬号 2012年12月刊行予定

新企画も好評！　充実した内容でお届けします。

特　　集　問い直そう、保育の中のあたりまえのこと8　－親支援とは言うけれど－　牧野カツコ先生インタビューほか

シリーズ　子どもが育つ場所を訪ねて　－ゆうゆうのもり幼保園（神奈川県横浜市）－

報　　告　「絵本の挿絵について」～絵本作家　黒井健さんのお話から

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 秋号 第111巻 第4号

平成24年10月1日発行
編集発行人／浜口順子
編集担当／田中恭子
発行所／日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所／株式会社フレーベル館
電話:03-5395-6657（編集）
振替／00190-2-19640
印刷所／図書印刷株式会社
定価／750円（本体715円）

©日本幼稚園協会 2012 Printed in Japan

編集協力／フレーベル館
編集スタッフ／伊集院理子
上坂元絵里
菊地知子
佐治由美子
宮里暁美

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613（営業）●

好評発売中

保護者との
やりとりが
楽しくなる！

イラストでわかりやすい対応事例集

Point ①
Q&A形式
明日から役立つ
対応がわかる！

Point ②
イラスト
具体的な事例を
楽しく紹介！

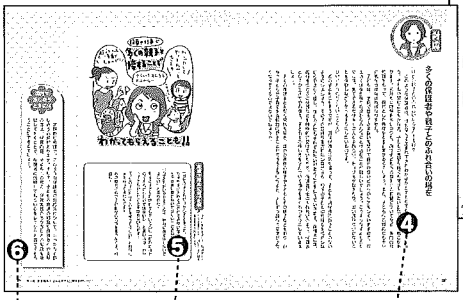
Point ③
ポイント解説
園での注意点が
わかる！

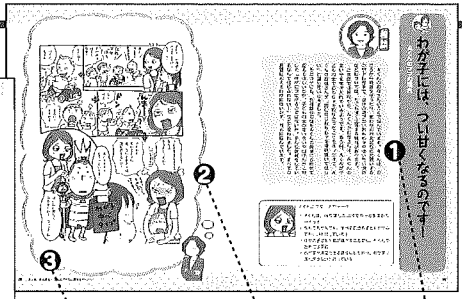
どうする？ こうする！
これで安心 保護者対応
松田順子／著
（東九州短期大学 特任教授）
定価1,785円（税込）
23×18cm 128ページ 10929

[内容]

第1章 いるいる！こんな保護者～保護者のタイプ別対応法
第2章 あるある！こんな子どもに関するやりとり
第3章 保護者自身の問題に向き合う
第4章 園の方針や体制への要望に対応する

あなたの悩みを解決する6つの構成





❶ 相談
具体的な保護者対応の相談内容

❷ 人物データ
相談内容の保護者のデータ

❸ マンガ
相談内容のマンガ

❹ 対応
注意すべき点や対処法を解説

❺ どうする？こんな例
現場から届いたその他の事例

❻ 園内で話し合うときには
園で対処する際のポイントを紹介

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一一一巻　第四号　平成二十四年十月一日発行

好評発売中

子ども・保護者との関係づくりの特効薬！

保育がもっと好きになる22の素敵なエピソード

効能①
発達理解
子どもの見方が変わり、保育がもっと充実する！

効能②
信頼関係
保護者に信頼される保育者になれる！

効能③
自己成長
受け入れることで自分にも人にも優しくなれる！

子どもの見方が変わる
みんなの育ちの物語
井桁容子／著
（東京家政大学ナースリールーム主任）
定価1,575円（税込）
19×15cm 112ページ　10930

［もくじ より］

- はじめに
- ナースリールームへようこそ
- 子どもってすごい！
- 困ったトラブル？？？
- 親も子も育つ時
- 子どもがうれしいこと
- いたずらの意味
- 子どもと一緒に成長
- おわりに

講演会受講者の声

今すぐ子どもたちに会いたくなりました（30代・保育者）

私も言葉で伝えられない乳児の気持ちを汲み取りたい（20代・保育者）

ほんわかと肩の力が抜けて、心が豊かになりました（40代・母親）

保護者の成長を認めてくれる保育に感動！！（30代・父親）

エピソードの一例です。続きは本誌にて！

episode 1
子どもってすごい！
風邪で口内炎になった智香ちゃん。痛くて口に入れた食事を吐き出し、しばらくすると「鼻で食べた！」と鼻の下にニンジンをベタッ。続いてニヤリとして「おめめから食べる！」と切干大根を瞼に。3歳児のユーモアに脱帽です！

episode 2
かみつきをトラブルにしない
友達の腕をかんでしまった浩介くん。お迎えに来たお母さんは顔面蒼白。容子先生が止められなかったことを詫び、「浩介くんはやさしい子に育つと保証します」と伝えると、お母さんは心が緩んで涙ぐみ、浩介くんを抱きしめました。

episode 3
ゆっくり育ちに付き合う
パジャマで登園したい太一くん。絶対阻止したいお母さん。朝の"ケンカ"が絶えない親子が、容子先生の助言で変化！　育ちを面白がることを学んだお母さんに見守られ、太一くんはいろいろな体験ができてとっても幸せです！

episode 4
そのままで二重丸！
もうすぐ妹が生まれ、お兄ちゃんになる滉太くん。お兄ちゃんに対する周囲の期待が大きく、少し不安そうです。容子先生が「そのままでいいのよ」と魔法をかけると、のびのびと自分を表現するようになった滉太くんでした。

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

定価　七五〇円（本体七一五円）☆